慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『韻府群玉』版本考(三)
Sub Title	Comparative Study of the Printed Edition of the Yuri fu qun yu (3)
Author	住吉, 朋彦(Sumiyoshi, Tomohiko)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2002
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.37 (2002.) ,p.199- 252
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20020000-0199

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『韻府群玉』版本考（三）

住吉朋彦

本稿では先ず、平成十四年度の在外伝本調査によって判明した事柄を中心に、拙稿「『韻府群玉』版本考（一）」（本集第三十五輯、平成十三年二月、以下前々稿と略称）、「同（二）」（同第三十六輯、同十四年二月、以下前稿と略称）に補正を加える。これら前二稿に記したのは、『韻府群玉』の原本と、洪武韻改編本に関する事柄である。次で新たに『韻府群玉』の新増説文本と、新増直音説文本に及ぶ[1]。紙幅の都合上、新増説文王元貞校本、続編本、増続会通本については本稿に掲載出来なかった。

一　原本・洪武韻改編本諸版解題　補正

先ず在外伝本調査等により新たに著録し得た伝本の中、前二稿に解題した、『説文解字』の増入を伴わない原本諸版と、原本を基として洪武韻の序に改編した版種につき補正したい。

○原本之属

韻府羣玉二〇巻　〔前々輯三四六頁、前輯四〇四頁〕

元陰時夫（時遇）編　陰中夫（幼達）注

元元統二年（一三三四）刊（梅溪書院）　二修

本版には、巻首をはじめ大量の補刻を加えた伝本があり、わ

が国の國學院大学図書館、大東急記念文庫、京都府立総合資料館の蔵本はこれに当たっているが〔前々輯三五一頁〕、新たに知見した後掲の上海図書館蔵本も同様である。ただこれらの伝本について補刻の跡を具さに追ってみると、伝本によって補刻の張数に小異がある。右の中、國學院本の補刻が最も少なく（原刻の残数が最も多く）、大東急本、京都府本では補刻の数を増している。上図本ではどうかと見ると、國學院本より補刻が多いのであるが、大東急本や京都府本よりは少なく、これによって、國學院本と大東急本等との間に修印の次数を加えなければならないことがわかった。以下、上図本の段階を二修、大東急本等の段階を三修と呼称する。二修本で新たに補刻されたのは以下の張子である。

○二修次補刻　第十巻第三十七・八張、第十一巻第十一・二、二十九・三十張、第十二巻第四十二・三張

これらが新増説文本を開刻した劉氏日新堂への原板移譲に伴う補刻であることは前稿に述べた通りである。またこれにより、三修本で新たに補刻されたのは、前々稿に報告の張子からこの二修次の補刻を差引いた、以下の張子ということになる。

○三修次補刻　第十巻第二十一・二十二、四十九張、第十一巻第一―四、四十五―八張、第十二巻第三十一・二張、第十三巻第十七・八、二十三・四、二十九・三十、五十三―六張

〈上海図書館　七七三二四七〉　二〇冊

訓点書入本　清徐乃昌旧蔵

後補淡茶色気泡文表紙（二六・四×一六・八糎）、包角。金鑲玉装。首に序、凡例、事目、目録を存するが、総目は近世期邦人の補鈔に係る。毎巻一冊。匡郭二一・一×一二・五糎（補刻）。本邦室町末近世初朱竪・傍・句・返点、送仮名、連合符、同墨音仮名、欄上補注、校注、同朱墨磨滅部補鈔を加う。第十三巻首に無辺方形陰刻「南／谷」朱印影、首に単辺方形陽刻「積學齋徐乃昌臧書」、目録首に「南陵徐乃昌／校勘經籍記」朱印影を存す。

徐乃昌の旧獲書では、北京の中国国家図書館にも同版無修の伝本を存する。北京の本は伊沢蘭軒の旧蔵書でもあり、共に近世以前に、一旦は日本に将来された伝本である〔前輯四〇四頁〕。

同　〔前々輯三五三頁・前輯四〇五頁〕

元至正二十八年刊（秀岩書堂）　拠元元統二年刊本

〈南京図書館（マイクロフィルム）K五〇三四〉

巻一、五―十二、十七補配〔明前期〕刊新増説文本

明文彭、彭年、清丁丙旧蔵

第二―四、十三―六、十八―二十巻を存す（二〇冊のうち八冊）。詳細後掲。

〈上海図書館　八一四六九七〉　二二冊

巻一―三、十七―二十清康熙二十八、九年補鈔（許濬）

巻十三―六補配明弘治六、七年刊新増説文本

後補藍色表紙（二七・二×一五・九糎）、浅葱色包角。天地截断、金鑲玉装（補鈔乙を除く）。見返し、前副葉子後補。第四、五巻を各二冊とする他は毎巻一冊。第六巻第三十七・三十八張欠、第七巻第十、九張錯綴。

序（補鈔乙）、目録（乙、末葉「元統甲戌春／梅溪書院刊」牌記模写、ここまで六張）、又序（補鈔甲〔清許濬〕）、「韻府群玉陰復春自序」以下一張、題下に（イ）単辺方形陽刻「半憂居士／藏書之印」朱印影）、事目（乙）、凡例（乙、ここまで二張）、題記（甲、一張）首低二格題「補鈔題語」、同行下に（ロ）単辺方形陽刻「中弍子」、（ハ）同「高陽博／明氏珍／藏圖書」朱印影を存し、次行より本文「辛卯冬有童子以廢書相售束而戾之今秋遇從檢閲中有韻府六帙覩／其字畫遒潔為前元之板所缺者一東至十灰暨入聲一韻因不憚晨窗夜／火手録成集而或則誚曰茲書窮搜彙刮誠博雅君子之所需然坊臚／戸設非若孔墻汲家難搆之奇何足費暮年之筆札勤老眼之糢糊／而矻々於可已之勞乎余應之曰唯々否々延祐迄今以年考之四百有餘滄／桑陵谷鼎社幾遷而其殘編猶然不朽毀良非易矣一旦将覆瓿是供／心焉忍乎繕而藏之一以全先代之遺文一以留今時之舊物不亦可乎於戲非／獨完吾輩惜書之一念并欲以告後之閲是書者其亦加之珍護／也哉時康熙二十九年歳次庚午莫鼇許濬謹識於石筍里之寓／樓」とあり、末行下に（ニ）無辺方形陰刻「石筍／里／寓公」、（ホ）単辺方形陽刻「許濬／字／致遠」朱印影を存す。巻首題「韻府群玉巻之一〔　〕莫鼇山人許濬致遠氏抄」、署名に重ね（ヘ）無辺方形陰刻「呉興／許氏」、（ト）単辺方形陽刻「讀画／齋臧」、同行に（チ）単辺方形陽刻「鏡澂／欣賞」、（リ）無辺方形陰刻「厚基／之印」、（ヌ）単辺方形陽刻「餘園／山人／玩賞」朱印影を存す。第一―三、十七―二十巻はこの許濬の補鈔に係る。本文は新増説文本で、無辺無界、毎半葉一〇行行三〇字。第三巻首題下「康熙己巳年陽月莫鼇山人許濬致遠氏抄」識語、第十七巻尾末行下「時康熙

二十八年陽月二十四日抄於石箏里／寓樓懦庵許濬其年週甲有二歳」識語、直下に（ル）無辺方形陽刻「致／遠」朱印影、第十九巻首題下「東洞庭山人許濬致遠氏補鈔」識語、巻尾末行下に双行で「康熙二十九年三月十六日燈下／録畢時年六十有三歳」識語、直下に（ヲ）無辺方形陰刻「臣濬」朱印影を存す。稀に欄上墨補注（許氏筆跡）、本文朱圏、傍点を加う。毎巻首前記イロハヘトチリヌ朱印影を存す。

又　〔明〕修（〔清江書堂〕）

第一巻のみ新増説文本に改めた補刻本。但し序目等は原刻、目録末張の木記「戊申春東山／秀岩書堂刊」を摺印しない。補刻部、巻首題「新増説文韻府羣玉巻之一　上平聲（墨囲陰刻）／（以下低六格）晩學陰時夫勁弦編輯／新呉陰中夫復春編註」。四周双辺（二〇・九×一二・五糎）毎半張一〇行、毎行二九字。小黒口（匡郭外周に接属）双線黒魚尾（不対向）、上尾下に「匀玉一ノ」と題し、下尾下に張付。巻尾題「新増説文韻府羣玉巻之一　上平聲（墨囲陰刻）」。件の補刻は、その字様と、静嘉堂文庫蔵本の封面「（上欄）清／江／書／堂・（中央上段黒牌）増／入／韻／會／説／文（陰刻）・（中央）韻府羣玉（大書）・（右欄）是書以事繫韻上渉羣經下包諸子不持易／於押韻抑且便於檢事欲観某事即某韻・（左欄）得之［（一〇格破損）］増注許愼説／文使［（一一格破損）］梓而行之（有界、毎欄四周双辺、行体）」より、概ね明前期、清江書堂の所為に係るものと推定される。清江書堂には、明宣徳六年（一四三一）刊行の『広韻』以下、明代を通じ万暦年間に至るまでの種々の版刻が知られ、明弘治十年（一四九七）刊本『増修附註資治通鑑節要續編大全』目録末木記「皇明弘治丁巳仲夏楊氏清江書堂重刊」（王重民氏『中国善本書提要』に拠る）等より、姓は楊氏と判ぜられ、建安の書肆と見做されている（『中国版刻総録』『明代版刻総録』『福建古代刻書』『明代版刻図釈』『全明分省分県刻書考』等[2]）。

第一巻を新増説文本に改めているのは、元末以来の新増説文本の流行と、これに起因する原本の後退に連動する事柄であろう。新増説文本は元至正十六年刊本以下、清代に至るまで半面一一行の本文で行われており、当該の補刻が半面一〇行とするのは特異で、これは元来の原本の行款に倣ったためと思われる。なお後掲の静嘉堂文庫蔵本については、前々稿に於いて既に著

録し、第一巻補刻の可能性に言及したが、当時、静嘉堂本の他にはかかる様態の伝本に接し得なかったので、全巻を具えた独立の別版に拠る補配の可能性を否定できず、仮に「巻一補〔明前期〕清江書堂刊新増説文本」と記した。その後、名古屋大学附属図書館蔵本が同様であるのを知見して[3]、静嘉堂本共々修刻に依ると判断し、便宜本稿にも重出した。

〈静嘉堂文庫　一〇二一・一七〉　一〇冊

詳細前々稿掲載。　〔前々輯三五六頁〕

〈名古屋大学附属図書館　八二二・一・I〉　二〇冊

明万暦四十四年補鈔（呉如琳）　明毛晋旧蔵

後補香色表紙（二五・二×一五・二糎）。襯紙改装。破損修補。天地截断。前後副葉各一枚。序、目録の順に綴して、凡例、総目を欠き本文。毎冊一巻。静嘉堂本よりも少しく後印。

第四巻首の二四張は明正統二年刊行の新増説文本（半面一一行、後出）による補配に係り、その後にもとの元至正二十八年刊原本（半面一〇行）第二十七張以下を存する。新増説文本の第四巻第二十四張は上平声十三元韻の首に至る内容で、原本の第二十七張も元韻の首に当たっているから、字種の上では不足がない。この補配部は料紙に補色が加えられ、原存部との調和が図られている。

第五巻第一―六張前半（下平声一先韻首）、第八巻第五十一・二張（尾）（下平声十五咸韻尾）、第九巻第一張前半（上声一董韻首）、第二十巻第四十張後半―第四十一張（尾）（入声十七洽韻尾）は補鈔に係り、同筆にて第八巻尾「萬曆丙辰（四十四年、一六一六）冬孟望日呉栗如録」、第二十巻尾「凡失去一先韻五葉半十五咸韻葉半董韻／半葉十七洽韻葉半開岐丈失此書命余録／以補其缺遂足成之／（以下低三格）萬曆丙辰易月晦日延陵呉如琳書／於長春館」墨識（識者不明）、次行下単辺方形陽刻「曾爲古／平壽郭／申堂臧」、無辺方形陰刻「郭申堂／庚寅年／收書印」朱印影（鈐者不明）を存す。第十一巻首前半葉も補鈔によるが別手に係る。第五巻第四十一・四十張、第六巻第四十五・四十四張、第十二巻第四十二・四・四十三張、第十四巻第三十八・三十七張錯綴。本文中、墨破損部補鈔・欄上校注、朱句点・傍線・磨滅部補鈔・校注、藍圏発・句・竪点・磨滅部補鈔・校注、黄圏発（句点）を加う。第四巻首補配部は墨欄上補注（別手）あり。序首に単辺方形陽刻「毛晉／之印」、同「毛

氏／子晉」、単辺紡錘形陽刻「元本」、目録首に単辺方形陽刻「汲古／主人」、同「汲古得／脩綆」、巻首に同「毛」「晉」朱印影（明毛晋所用）を存す。

同　〔前輯四一三頁〕

〔明前期〕刊　後印（嘉靖三十一年荊聚序附刻）

覆元至正二十八年刊本

〈高麗大学校中央図書館（石洲文庫）貴中一〉　一六冊

欠巻五、十五・十六、二十　巻六補鈔

後補丁字染卍繋地蓮華文空押艶出表紙（二六・八×一五・五糎）左肩打付に「韻府羣玉幾」と書す。右肩より打付に別筆にて韻目を列記す。裏打改装。本文白紙印。序、荊聚序、凡例、事目、目録の順に綴し、目録末に存する無文有界の木牌は後半が刪去されている。毎巻一冊。第一巻第七、八張、第三巻第一―二張、第六巻全張、第八巻第十五、五十二張、第十九巻第一、三―五張は補鈔に係り、第九巻第四十九張（尾）を欠き、第十三巻第九、八張を錯綴す。匡郭二〇・三×一二・四糎。

第一、二巻後に紙葉を改め続編本補鈔、首「韻府羣玉増續青田　包瑜　希賢　續編」と題し、次行小字三字格を低して「一東」等と韻目を標し、次行より本文。注小字双行。一東韻は「（東）」と字目を示し、直下「賦河東」の語目及び注より始めている。これが後に増続会通本を成さしめた明包瑜撰述続編本の単行本文であるのか、既成の増続会通本よりの抽出であるのか、なお不明である。

首に無辺方形陽刻「完／文」、単辺方形陽刻「柳／申／源」朱印影を存す。

〈上海図書館　八四二一六三〉　四〇冊

民国劉承幹旧蔵

後補浅葱色艶出表紙（二五・五×一六・二糎）、浅葱色包角。襯紙改装。白綿紙印、虫損修補。序、凡例、事目、目録の順に綴して、荊序を欠き本文。毎巻二冊。第一巻尾牌記刪去。

首尾冊首に単辺方形陽刻「呉興劉氏嘉／業堂臧書記」朱印影（劉承幹所用）を存す。

劉承幹『嘉業堂善本書影』の目録に「韵府群玉二十巻〈元刊本〉」と著し、同巻四（子部）に掲載の巻首一葉は本版と同種であるが、この上海図書館本とは別の伝本である。

同　〔前々輯三六三頁、前輯四〇七頁〕

朝鮮明正統二年（一四三七）跋刊（江陵・原州）

覆元元統二年刊本

この版、新出のものでなく、前々稿と前稿に〔朝鮮初期〕刊と標記した版種である〔前々輯三六三頁・前輯四〇七頁以下参照〕。本版については、版式字様より朝鮮朝初期の版刻と推定される上、『東文選』巻百三に採録され正統二年の年記を有する南秀文「韻府群玉跋」の伝存、前間恭作氏『古鮮冊譜』以下、在韓伝本に関する諸解題、諸目録の記述によって、南跋の本版に係る可能性を認め得たものの、国内に南跋を備える伝本を見出し得ないことから、その断定を避けた。しかしその後、在韓伝本の調査が叶い、南跋附刻の同版本に接し得て、その年記を刊刻に懸け得るものと判断することができた。以下、新たに判明した事柄を補って旧記を改正する。またその他にも訂すべき点があるので、併せて記したい。

巻後別板に南秀文跋（一張）。首より低二格、諱字改行二格擡頭で本文「元朝瑞陽陰氏蒐獵典策剔抉精奇以事／繫韻以韻摘事部帙雖簡而苞羅萬卷使／觀者如登崑崗而璆琳瑯玕惟其所取真／可謂羣玉之府也況我東方載籍不夥得／閲此編其為有益詎可量已宣德乙卯秋／江原道監司臣柳季聞拜辭之日／上諭之曰羣玉為書其於文士所裨實多予欲／刊布卿其不煩民以圖之越明年春慕游／手備材以／聞爰〃命集賢殿出經筵所藏善本二部參校送之於／是始鋟于梓用廣其傳於戲我／殿下留神経傳無書不刊而又拳拳於是編使／儒者皆獲至寶其廣惠後學於無窮也至／矣盡矣正統二年丁巳六月日朝奉大夫／集賢殿應教知製　教経筵撿討官兼春／秋館記注官〈臣〉南〈秀文〉拜手稽首敬跋」（楷体写刻）。毎半張一〇行、行一八字。跋後一行を隔し低九格で「江陵原州分刊」と刻す。

南跋中、乙卯は明宣徳十年、即ち朝鮮世宗十七年（一四三五）。柳季聞、字叔行。本貫、黄海道文化。高麗禑王九年（一三八三）生。朝鮮太宗八年（明永楽六年、一四〇八）文科及第。太宗・世宗朝に諸官を経歴し、世宗十七年に前官を辞して江原道都観察使の任に遷る際、世宗より件の版刻を命ぜられた。都観察使は、監司とも称し、道庁に在って一道を管掌する要職である。同十九年、漢城府尹に遷る。同二十七年（明正統十年、一四四五）歿。また明朝の正統二年は、世宗十九年（一四三七）に当たる。柳氏は前年の春より準備を始め、集賢殿より「經筵所藏

善本二部」を以て校合された本文の送附を得、これを底本として版刻を督し、その事業の正統二年六月前後に成ったものであろう。南秀文、字景質、又景素、敬斎と号す。本貫、慶尚道固城。太宗八年（一四〇八）生。世宗八年生員より文科及第、集賢殿副校理を経て、同十八年（一四三六）四月の文科重試に状元及第、直ちに集賢殿応教となり、翌年に本跋を記した。のち集賢殿直提学に至り、同二十五年（明正統八年、一四四三）歿。

跋後刊記中、江陵・原州は共に江原道内の郡名で、柳氏管轄下の両郡に本版の刊刻を分掌したと解される。これが如何なる分掌であったものか不明であるが、この点については『世宗実録』十年（一四二八）正月廿六日己酉条に見える、左掲の記事が参考となろう。(4)

禮曹啓、江原道監司報、四書大全已分三處刊板、各構樓閣、分類藏置、毋使亂秩。如或刓闕、隨即改刊。守令交代之時、明載解由、在前冊板。亦依此例、其藏書閣營造、聽自願僧徒、功訖賞職。請依所報、並諭他道、依此施行。從之。

これに拠れば、江原道では『四書大全』を三処に分刊し、各処に楼閣を設けて板木を分蔵し、官衙の管理下にその保全に勤めた、というのである。この例を直ちに本版に当嵌めることはできないが、或いは、集賢殿より得た本文を江陵と原州とに分かち、監司の指示の下に両処に刊刻して、そのまま板木を置いたと見るべきではなかろうか。なお実情は不明であるが、本稿では一先ず刊記を重んじ、前掲の様に著した。

さて本版の刊刻につき右の様に考えると、他にも同様の経緯によって刊刻された版本を存することが思い合される。わが国の愛知県西尾市岩瀬文庫に蔵する朝鮮明宣德九年跋刊（慶州・密陽）本『古今韻会挙要』巻後の別板に、明宣德九年、即ち世宗十六年（一四三四）に記された跋と列銜とを刻してある。(5)次にこの跋文の要処を示したい（改行稿者）。

韻書之來尚矣。而諸家詳畧各異（中略）我朝右文興學、凡經史子集、遺文秘書、無不刊行。而唯此書未見鋟梓、誠可嘆也。壬子冬、臣承乏監司之任、慨然有意板刊。而訪之道内、無有藏者。癸丑秋、具辭以聞、特蒙允許。仍賜經筵所藏二部、以爲刊本。其所以崇重儒學之意、至矣盡矣。臣即分付于慶州・密陽、閱五月而訖工務、欲廣布以惠無窮。庶幾仰裨盛朝興文之化之萬一云。

宣德九年甲寅五月　日　慶尚道觀察黜陟使通政大夫兵曹左參議寶文閣直提學臣辛引孫拝手稽首敬跋。

これに拠れば、同版は壬子、即ち世宗十四年（一四三二）に、新たに慶尚道の監司に任ぜられた辛引孫によって版刻が図られ、先ずは道内に底本を求めたが得られず、翌年に世宗の允許を得て「経筵所藏二部」を賜り、これを以て慶州・密陽の両郡に分かち刻せしめ、同十六年の刊行に至った、というのである。

この例を以て当該の版刻と引較べると、諸道の監司が、その在任中に道内の刻手、資材を用いて未刊の書の版刻を図ったという点で、両者は揆を一にしている。よく注意すると『韻会』の場合は辛氏自らの意に発し、跋も自ら記しているのに対して、『韻府』の場合は、柳氏が世宗の意を体して事に臨み、完成の後には集賢殿学士の南氏に跋を得ている（跋は中央の側から書かれている）など、相違する点も認められる。しかし最終的には経筵所蔵の伝本を校合して用いていること、また実際の刊刻については道内の官衙に分附していることなどは、両者に符契を合しており、柳氏の『韻府』版刻の命を得たのが、辛氏の発案による『韻会』刊行の翌年であることを考え合せると、『韻府』の版刻を命じた世宗には、辛氏による『韻会』刊行の事業が、近い実例として想起されていた可能性がある。これを是とすれば、両者は一連の事業として解されるのであり、延いては世宗朝に於ける版刻について、一の典型を提示しているものとも見做されよう。広く知られている様に、世宗は中央の集賢殿学士等を動員して庚子字・甲寅字以下の鑄造を命じ、経筵所蔵の書を基礎とする活字印刷事業を推し進めたが、一方では同じ経筵本を用いて、諸道、諸郡に分散する形での冊板の普及をも図ったのである。[6] こうした情況に鑑みる時、両者は単に諸道の版刻としてのみ遇すべきものではなく、中央の主導に基づく大規模な出版事業の一環として成された冊板と解され、現存の諸伝本はその実例として位置付けられることとなろう。[7]

本版の刊刻情況が上述の様なものである場合、その本文の性格との間にも整合性が見られるであろうか。本版本文の特色については前々稿に述べ、前稿に修正を施した。今特に変更すべき点を得ないが、その要旨を示せば、一、本版の本文は基本的に元元統二年刊本に拠るものである。二、元統版の本文に墨格の認められる場合、新増説文本（またはその影響下にある〔明洪武八年序〕刊本）によって校改し、初度の版刻以前にほぼこれらを除き去っている。元統版磨滅の際にも同様の場合がある。三、元統版の本文に誤りある場合については、特に校改が施されていない、というものであった。前掲南跋中、本文の採択や

処遇に関わる点を挙げれば「爰命集賢殿、出經莚所藏善本二部、參校送之」との記文がある。このことは、底本の墨格を校合によって除いている点に対応し、また本版の校正が版刻後の剜改に依らないことも、江原道では集賢殿での校合をそのまま受容れたものと解すれば、二に照らして順当である。三についてはどうであろうか。このことは、集賢殿での校合がどの程度の精度を伴ったかという点に係り、その実情は不明である。しかし跋に拠る限り、完成まで一年餘に過ぎなかった所要の時間を考えると、殊更に問題とすべきものとは思われない。この様に考えると、本版本文の情況は、中央の主導により地方の資材を以て刊刻したと思われる[8]、出版の事情を裏付けているものと判ぜられる。本稿に、附刻跋文の年記を刊年に懸ける所以である。

以上の他、本版の本文や版式については、なお旧稿の記述に拠られたい。以下新たに知見した伝本について記す。

〈延世大学校中央図書館　貴五一五〉　（九）冊

（欠巻七・八）　有跋本

丁字染艶出表紙（二六・九×一六・五糎）（首冊欠）左肩打付に「玉府〈第幾〉」と書し、右肩より韻目を列す。天地截断。目録首二張欠。〔毎冊二巻〕。

匡郭二〇・二×一二・三糎。早印本。巻後に南跋を存す。

欄上墨韻目注記、稀に細字補注あり。

この本、首尾二冊の外は破損のため閲覧停止中にて、中間の冊を目睹していない。員数、欠巻は『延世大学校中央図書館古書目録』第二輯の著録に従って記したものである。

〈誠庵古書博物館　三―一〇三九（一九六五）のうち〉

有跋本　巻十一―十四補配〔朝鮮前期〕刊本

第十九・二十巻（三冊のうち一冊）を存す。第二十巻第四、十三・十二……六・五、十四張と錯綴。この間、欄上に「錯簡」と墨書し張付を標記す。なお別版補配部とも共通する別手墨韻目注記を存するが、この注者は錯簡を考慮しない。

第二十巻首匡郭一九・七×一二・六糎。早印本。有跋。

冊首欄外に「□□亭」墨識あり、擦消。冊首尾、第二十巻第二十二張に単辺方形陽刻「可／矯」朱印影を存す。詳細後掲。

〈誠庵古書博物館　三―一〇四〇（一九六二）〉　五冊

存巻七・八、十一―十六、十九・二十

丁字染表紙（二七・五×一五・五糎）左肩打付に「韻府羣玉幾」と書し、右肩より打付に同筆にて韻目、右下方「共十」と書す（本文書入別筆）。首冊のみ見返しを後補して右辺に「韻府羣玉」と書す（又別筆）。〔毎冊二巻〕。第十五巻第一―十張を欠く。第七巻首匡郭二〇・二×一二・五糎。

毎冊尾「竹溪安氏後人家蔵」墨識、間々詩草。欄上、墨韻目注記、別手（識語と同か）語目注記。本文、墨語目傍点、極稀に朱藍を雑う。第十九巻首題下並に同欄外に印影を存し墨滅す。

〈誠庵古書博物館　三―一〇四二（一九六四）〉　四冊

存巻五―八

後補丁字染雷文繋地菱形花卉文空押艶出表紙（二四・四×一五・五糎）左肩打付に「韻玉〈幾〉」と書し、右肩より打付に同筆にて韻目を列す。裏打改装。見返し欠。前後に書扉。前、左肩「韻府」と、後、中央「韵府羣玉」と、右下方「曹申寶蔵」墨書、左方単辺方形陽刻不明古文墨印三顆連鈐。〔毎冊一巻〕。第七巻首補鈔。第八巻尾欠、罫のみ補鈔。

第五巻首匡郭二一・二×一二・二糎。

欄上墨韻目注記を加う（改装後）。

〈誠庵古書博物館　三―一〇五一（二五七四）〉　一冊

存巻三・四

丁字染表紙（二五・四×一五・八糎）左肩題簽剥落痕に打付に「韻府羣玉三」と書す。後表紙見返し「冊主安東千一澄」「韻府羣玉巻之四／冊／上平聲」「丙寅重初／買」「冊主灝陽千氏玄［　］／癸亥重陽初三日成」識語。第三巻第一―四張前半、第四十四巻第六十五・六張（尾）欠。〔毎冊二巻〕。

第四巻首匡郭二〇・三×一二・四糎。

欄上墨字目注記、本文傍点を加う。

〈高麗大学校中央図書館（薪庵文庫）＊貴二〇Aのうち〉

巻七・八、十一―十四補配同版本

第九・十巻（四冊のうち一冊）を存す。焦茶色雷文繋地蓮華唐草文空押艶出表紙（二六・〇×一六・七糎）墨書あり、不分明。

第九巻第一張欠。〔毎冊二巻〕。補配別装、後掲。

毎張欄上、墨韻目・字目（首のみ）注記。本文、朱字目・語目傍点を加う。

〈高麗大学校中央図書館（薪庵文庫）＊貴二〇Aのうち〉

巻七―十二補配同版本

第十三・十四巻（四冊のうち一冊）を存す。渋引表紙（二五・七×一六・八糎）左肩小簽を貼布し「韻玉〈去／聲〉」と書す。〔毎冊二巻〕。補配別装、前後掲。

毎張欄上、墨韻目注記。本文、朱字目、傍点を加う。

〈誠庵古書博物館　三―一〇四四（九六一）〉　六冊

欠巻五―十、十三・十四

茶色雷文繋地菊花唐草文空押艶出表紙（二五・〇×一五・八糎）（第一・二冊新補素表紙）左肩打付に「韻府羣玉〈幾之幾〉」と書し、右肩より声韻目を列す。見返し、第一冊後、左肩「韻府群玉」左傍「敬謨堂」、第二冊後、題詩右肩「聽天窩」、同末「李（花押）」、第五冊後「冊主永陽李氏家蔵／聽天窩所藏」、第六冊後、左肩「韻府群玉入聲」左傍「聽天窩」、目欠、目録末張後半木記部分（補刻別版）のみを存す。第三巻第一―六張欠。〔毎冊二巻〕。匡郭二〇・〇×一二・四糎。後印本。

第三冊首欄外「聽天窩」、第六冊尾「李（花押）」墨識。第三―六冊首に単辺方形陽刻「□□／閑人」、無辺方形陰刻「永陽／李春」朱印影を存す。

該本の如く、本版後印本には序目を補刻した伝本があり、本邦布施美術館蔵本（一一二一）も同様である。前稿に布施本を〔朝鮮〕刊本と録し、本版と別種の様に記したのは失考である〔前輯四一七頁〕。また本版によった東京大学東洋文化研究所蔵本の第十九・二十巻について、別種〔朝鮮〕刊本の補配と著したが〔前々輯三六四頁・前輯四一八頁〕、これは本版後印本の別伝本を補配したもので、やはり失考である。従って、前輯にこの布施本、東大本を以て著録した〔朝鮮〕刊本なる版種は、本版の、序目を補刻した後印の零本を誤って著録したもので、別種ではなかった。記して訂正したい。

〈誠庵古書博物館　三―一〇四一（一九六六）〉　七冊

欠巻一・二、九―十二、十五・十六

丁字染艶出表紙（二七・七×一六・九糎）左肩打付に「韻府羣玉〈幾〉」と、右肩より韻目を書す。見返し、第一冊前、敬謨堂詩文稿。後、李龍鉉詩文稿。第四冊前「韻府羣玉敬謨堂蔵／遺之後昆圓唯永終」、後「永陽李龍鉉徳普」、第七冊前「此冊共十巻即　先業藏之／物也中間借於人補五八三編／公能見先貸恨當如何哉歳／壬申秋改粧而藏之慎勿／借毀而保守焉」識語。後、

題詩、右傍「永川李氏家蔵」細書識語。毎冊二巻。第七巻第四十張、第三十六・三十七張間に錯綴。
第三巻首匡郭二〇・二×一二・五糎。後印本。
欄上、朱字目注記。本文、朱墨傍点。墨傍点、磨滅部補鈔（藍筆を雑う）。又欄上墨（別手）韻目注記。毎冊首尾欄外「汾湖敬謨堂」「敬謨堂」等識語。第四、六、七冊首尾欄外「主（王）上點李（花押）」等識語（別筆）。第四冊尾に単辺方形陽刻不明墨印二顆連鈐、第五・七冊尾に単辺方形陽刻「永陽／李氏」「章漢／道淵」朱印影を存す。

〈誠庵古書博物館　三―一〇四五（九五〇）〉　一冊
存巻一・二
新補素表紙（二五・四×一六・三糎）。序（首二張）、目録、凡例、事目の順に綴す（補刻）。〔毎冊二巻〕。第二巻第五十一張（尾）欠。
匡郭二〇・一×一二・五糎。
欄上墨韻目注記、本文傍点、傍線を加う。本文中三箇所に単辺方形陽刻不明朱印影を存す。

〈延世大学校中央図書館　貴五一六のうち〉
巻九・十補配同版後印本
第十七・十八巻（二冊のうち一冊）を存す。後補藤色雷文繋地蓮華文空押艶出表紙（二六・五×一六・七糎）左肩打付に「韻府羣玉九」等と書し、右肩より韻目を列記す。〔毎冊二巻〕。補配別装、後掲。
第十七巻首匡郭一九・三×一二・四糎。
毎張前半、欄上墨韻目注記、本文間々傍点、傍線を加う。

〈高麗大学校中央図書館（薪庵文庫）＊貴二〇Aのうち〉
巻七―十、十三・十四補配同版本
第十一・十二巻（四冊のうち一冊）を存す。素表紙（二六・二×一六・一糎）左肩打付に「韻府羣［　］（破損）」と、右肩「辛丑窃月」と書す。〔毎冊二巻〕。補配別装、前掲。

〈延世大学校中央図書館　貴五一六〉　二冊
存巻九・十、十七・十八
巻十七・十八補配同版早印本
黄檗染卍繋地蓮華文空押表紙（二六・二×一五・九糎）（後表紙、後補同工艶出）。第九巻第一―四張欠。第十巻第四十五張以下

欠。〔毎冊二巻〕。補配別装、前掲。
第十巻首匡郭一八・五×一二・五糎。後印本。
毎韻首、欄上墨韻序数、韻目注記。本文、稀に墨傍点。

〈大韓民国国立中央図書館　貴五八〇〉　二冊
存巻九・十、十五・十六
巻九・十補配〔朝鮮前期〕刊本
後補黄檗染卍繋地文空押表紙（二五・〇×一六・二糎）右肩打付に「韻府羣玉　巻十五」と書す。紅糸綴。見返し新補。前後副葉各一枚、同。〔毎冊二巻〕。補配別装、後掲。
第十五巻首匡郭一九・四×一二・四糎。後印本。
毎張前半欄上、墨韻目注記。本文、墨圏・傍点、稀に重書校改。
首尾に単辺方形陽刻「漢忠／□□」朱印影を存す。

〈高麗大学校中央図書館（薪庵文庫）＊貴二〇A〉　四冊
存巻七―十四
巻九―十四補配同版本
素表紙（二六・四×一六・〇糎）左肩打付に「韻府羣玉」と書す。〔毎冊二巻〕。第七巻第一張欠。第八巻第三十八・二十八張を相互に錯綴す。補配別装、前掲。
第八巻首匡郭二〇・〇×一二・五糎。後印本。
墨欄上韻目注記を加う。

又　〔後修〕
後掲の伝本には第十九巻第三十―三十三張に補刻と思わしき箇所があるので、便宜別掲した。なおこれまでに掲出した後印諸伝本にも補刻本が含まれていたかも知れないが、第十九巻を存しないために不明とせざるを得なかった。

〈高麗大学校中央図書館（薪庵文庫）貴二〇A〉　七冊
欠巻九・十、十三・十四、十七・十八
丁字染雷文繋地蓮華文空押艶出表紙（二五・七×一五・六糎）左肩打付に「群玉〈第幾〉」と書し、右肩より声韻目を列記す（第一冊前表紙剥落、素表紙。左肩に「韻府羣王」と、右肩より「辛丑三月」と書す）。天地截断。第三冊後見返し右肩より「辛未正月　日／壬申八月　日」識語。序、事目、凡例、目録の順に綴し本文。〔毎冊二巻〕。

匡郭一九・九×一二・四糎。極後印本。
毎張欄上、墨韻目注記、墨（別手）字目注記。本文、墨字目傍点、磨滅部補鈔を加う。

同　〔前々輯三六五頁、前輯四〇八頁〕
〔朝鮮前期〕刊　覆朝鮮明正統二年跋刊本

本版についても、前稿までに国内の伝本を著録したが〔前々輯三六五頁・前輯四〇八頁以下参照〕、新たに在韓伝本を多く目睹し得たので、以下に記して補いたい。また韓国に於ける本版の伝存情況より判明する事柄を、伝本掲出の後に記した。

〈大韓民国国立中央図書館　貴一三四〉　一〇冊
巻五・六補配同版後印本　朝鮮総督府図書館旧蔵
当館新補黄色雷文繋地蓮華文空押艶出表紙（二八・一×一八・一糎）、次で丁字染艶出表紙。左肩打付に「韻府羣玉〈幾之／幾〉」と書し、右肩より韻目を列す。当館裏打改装（原紙高二七・五糎）。序、目録、事目、凡例の順に綴し本文。毎冊二巻。匡郭一九・八×一二・六糎。極早印本。

第十二巻第二十三張補鈔。毎張前半欄上、墨韻目注記、補注もあり。本文、墨傍圏点、破損部補鈔。第一冊前見返し「此冊■庚■申■五月日買得」、同冊後見返し「聾齋蔵■■■」墨識、本文末葉後に一葉を補い前半に「此冊即我生庭由来舊仲而年／来為家計所迫遽入於他人篋／中故以其價還覓以為體先意／垂後昆之資幸須勿毀而永作／傳興寶荘云爾／（低六格）庚申夏書聾翁」墨識、同首行右傍「聾齋蔵」墨識。毎冊首に単辺方形陽刻「朝鮮總督／府圖書館／臧書之印」朱印影を存す。[9]

〈誠庵古書博物館　三―一〇三九（一九六五）〉　三冊
存巻十一―十四、十九・二十
巻十九・二十補配朝鮮明正統二年跋刊有跋本
丁字染蓮華文空押艶出表紙（二八・六×一六・九糎）左肩打付に「韻府羣玉　〈幾之幾〉」と書し、右肩より声韻目を列す。見返し詩草（第三冊は欠く）〔毎冊二巻〕。
第十一巻首匡郭一八・八×一二・四糎。早印本。
欄上墨韻目注記。僅かに細筆校注もあり。

〈延世大学校中央図書館　貴五一八〉　一冊

存巻十七・十八

丁字染雷文繋地蓮華文空押艶出表紙（二八・七×一七・〇糎）

左肩打付に「韻［　］玉」と書し、右肩より声韻目を列す。天地截断せざるか。見返し詩草。〔毎冊二巻〕。

第十七巻首匡郭一九・三×一二・六糎。早印本。

毎張後半欄上、墨韻目注記。末尾左方欄外「主稼皐成□」墨識、直下にも識語あれども墨滅せらる。

〈高麗大学校中央図書館（石洲文庫）貴二〇〉　二冊

存巻九・十、十五・十六

巻九・十補配同版後印本

丁字染雷文繋地蓮華文空押艶出表紙（二六・七×一五・三糎）

左肩打付に「韻府羣玉〈幾〉」と書し、右肩より韻目を列す。

補配別装、後掲。前副葉一枚。〔毎冊二巻〕。第十五巻第一張欠。

第十六巻首匡郭一九・八×一二・四糎。

毎張欄上、墨字目注記、稀に補注。本文、韻目朱圏点、字目朱囲、墨傍点。末尾不明墨識。前副葉前半無辺方形陽刻「完／文」、単辺方形陽刻「柳／申／源」朱印影。

〈延世大学校中央図書館　貴五一七〉　一冊

存巻一・二

後補黄檗染表紙（二四・六×一六・一糎）左肩打付に「韻府羣玉」と書す。もと五針眼釘を三針眼に改装。見返し、墨書「周」氏論稿。餘白に藍書にて瓢形「白南」、単辺方形陽刻「權／相／堯」「舜／承／氏」印影摸写、「白南蔵」識。序（首二張欠）、目録、凡例、事目の順に綴し本文。〔毎冊二巻〕。

匡郭一九・七×一二・四糎。

首のみ墨傍点、補注、藍筆を雑う。

〈延世大学校中央図書館　貴一一一／三〉　二〇冊

朝鮮趙穆旧蔵

丁字染艶出表紙（二四・六×一五・六糎）左肩打付に「韻府羣玉〈幾之幾〉」と書し、右肩より韻目を列す。毎冊、前見返し左下方「共二十」墨書。序、事目、凡例、目録の順に綴し本文。

毎冊一巻。

匡郭一九・六×一二・四糎。

毎半張欄上、墨韻目注記。本文稀に墨傍点、磨滅部補鈔。第十七冊後見返し「乙酉春印于漢中」墨識語並に単辺円形陽刻「月

川／書堂」朱印影（趙穆所用）、第二十冊後見返し「乙酉春印于漢中／是年夏裝于陶山／（低四格）東皐識」墨識語並に同前朱印影、毎冊前見返し同朱印影、毎冊首尾に単辺方形陽刻「東皐／散人」朱印影を存す。このうち「月川」「東皐（皋）」は朝鮮宣祖朝の儒者・趙穆の号、「陶山」は趙穆の書院号で、「乙酉」は宣祖十八年（一五八五）に当たる。『延世大学校中央図書館古書目録』第二輯所収「貴重図書書架目録」参照。第六巻第二張に無辺方形陰刻「李印／奕中（李奕中印）」朱印影を存す。

趙穆、字士敬、月川、又東皐と号す。本貫、江原道横城。中宗十九年（一五二四）生。李滉（退溪）門。明宗七年（一五五二）生員試に中るも専ら師門に学び、挙を経ず学問により、薦を得て任官。慶尚道礼安の地に陶山書院を設けた。『困知雑録』『月川集』の著作がある。宣祖三十九年（一六〇六）歿。

〈高麗大学校中央図書館（石洲文庫）貴二〇のうち〉

巻十五・十六補配同版早印本

第九・十巻（二冊のうち一冊）を存す。淡茶色朝鮮表紙（二六・四×一五・八糎）左肩打付に「韻府羣玉」と書し、右肩より韻目を列す。補配別装、前掲。

第九巻首匡郭一九・六×一二・三糎。

毎韻首並に毎張前半欄上、墨韻目注記。本文、墨傍点。

〈大韓民国国立中央図書館　貴一三四のうち〉

巻一―四、七―二十補配同版早印本

第五・六巻（一〇冊のうち一冊）を存す。本文原紙高二六・四糎、印面内横接あり。第六巻第四十五―五十三張（尾）補鈔。欄上墨韻目注記、本文補鈔。藍筆を雑う。首に方形陽刻「朝鮮總督／府圖書館／臧書之印」朱印影を存す。詳細前掲。

〈大韓民国国立中央図書館　貴五八〇のうち〉

巻十五・十六補配朝鮮明正統二年跋刊本

第九・十巻（二冊のうち一冊）を存す。新補黄檗染卍繋地文空押表紙（二四・七×一六・三糎）左肩打付に「韻府群玉　巻九、十」と書す。一部破損修補。見返し新補。補配別装、前掲。

第九巻首匡郭一九・六×一二・五糎。

毎張前半欄上韻目注記。尾に双辺方形陽刻「綾城」、双辺方形陰刻「後學／□軒」墨印影を存す。

これまでに実査し得た本版在韓伝本に関する知見のうち、本版の刊刻自体に関わる事項は、延世大学校中央図書館所蔵の趙穆旧蔵本〈貴―一―一／三〉二〇冊に見出される趙氏識語である。即ち趙氏による「乙酉春印于漢中」の言及は、当該伝本印出の時期と場所とを限定している。この記文について評価するのに先立ち、前々稿と前稿、また本稿前節までに判明している事柄を整理すると、まず本版は、朝鮮明正統二年（一四三七）跋刊（江陵・原州）本の覆刻であるから、同版刊刻以降の成立に係ることは自明である。本版刊刻の時期について、陽明文庫蔵本紙背官文書に見える「進士　崔□／父（中略）汝漑」「進士　趙怡」の文言から、崔洙、趙怡の両名が小科及第した宣祖六年（一五七三）以降、両名の大科及第した同十五年（一五八二）までに成立した文書を料紙に用いたと知られ[10]〔前輯四〇八頁参照〕、同本は宣祖六年以降、反故の保存期間を勘案すると、恐らくそれ程には降らない時期の印行と推され、また本版の刊刻はその時点よりも前と判ぜられた。また布施美術館蔵本本版補配部の紙背に、甲寅字体銅活字の試印の跡が見られることから、中央官署での印出が想定され、その刊刻自体も内府での所為であることが示唆されている〔前輯四〇七、四〇九頁、本輯二〇八頁並に注（8）参照〕。こうした条件の下に、当該延世大学校蔵本の、趙穆による「乙酉春印于漢中」の識語を見ると、趙氏の生歿から考えて「乙酉春」は宣祖十八年（一五八五）の春季に比定され、漢城府中に印出したということであるから、少なくとも刊刻の時期を宣祖十八年以前と見、その板木は漢城に置かれたと見ることができ、前考の導く所と符契を合していることが判る。

右の点を基に、本版の有する本文について一考を加えたい。前稿までに記した本版本文の特色は次の様なものである。一、本版本文は基本的に朝鮮明正統二年跋刊（前稿まで〔朝鮮初期〕刊と標記）本のそれを踏襲している。二、本版には一旦整版の後、〔明洪武八年序〕刊本に従う剜改が加えられている。三、本版にはまた全般に、整版者独自の判断に基づく校改、殊に略体字を正体に改める作業が施されている。これらの諸点に、本版印行の情況を勘案すると、底本である正統跋刊本の訂正と更なる普及の図られた点に、本版刊刻の意義を見出すことが可能である。さらに、正統版の刊刻が世宗の命に基づいて江原道に附託されたものであったのに対し、本版の板木が内府の儲となっている点を想起すると、本版に於ける周到な本文の校改は、そ

の料にも採られた洪武版が明朝南監の儲であったのと同様に、中央学官の見識として示されたものではなかったか、と考えられる。

○洪武韻改編本之属

韻府羣玉一八巻　〔前々輯三六七頁、前輯四〇九頁〕
元陰時夫編　陰中夫注　明亡名改編
〔明洪武八年（一三七五）序〕刊（〔南監〕）〔明修〕

本版には後代の補刻本を存する。後掲上海図書館本を見るに、第四巻第七・八張、第七巻第十九・二十、二十五・二十六張、第八巻第五、十一・十二、四十三張、第九巻第一・二、三十三張、第十巻第一、二十一、四十四張は補刻に係り、この中の数張の中縫部下象鼻に「徐珩」の工名が見出される。

『南雍志経籍考』巻下に本版を著録して「正徳丁卯重加修補繕刻、有祭酒濟南王敕識」と記しており、正徳丁卯は二年（一五〇七）に該当するが、この時の補刻であった可能性がある。

〈上海図書館　長五九八四一〉　三冊
存巻三・四、八、八―十　白綿紙印

表紙欠（料紙二九・八×一六・五糎）。白綿紙印。本文共紙の前副葉子一張を存す。〔毎冊二巻〕。第三巻首、第四、八巻尾欠。欄上に墨筆の補注を施す。

二　新増説文本・新増直音説文本諸版解題

先ず新増説文本について記す。在来の『韻府群玉』の単字注に『説文解字』等の注を増入した、いわゆる新増説文本は、後述の元至正十六年刊本を初刻とする。この際に加えられた増入の行為について、前稿「（四）新増説文本の成立について」に詳述したが〔前輯四二八頁以下〕、その梗概は左の如くである。

元至正十六年刊刻の『新増説文韻府群玉』には、目録の末に劉氏日新堂の木記告文があり「毎字音切之下、續増許氏説文」のことが謳われている。実際に本文を閲すると、確かに第一巻の上平声一東韻「東」字注以下、原本には見られない「説文」と標示の注が補われている。原本にも文字によっては『説文解

字』の注を用いてあったが、この版では全体に亙ってより多くの文字に、この増入が認められる。しかし増入の実態について子細に検討してみると、二つの点で異和の感を生ずる。即ち第一に、「説文」増入の字種の採択に規矩をもたず、増入記事の字数の多寡も一様でないこと、第二に、第十巻の途中から第十五巻の途中まで、約五巻分については、この「説文」の増入が全く見られないこと、の二点である。

右の第一の点は、実はこの増入が先行する韻書『古今韻会挙要』に拠っていることを知ると了解される。両書の比較から、本書に於ける「説文」増入の有無やその字数の多寡は、『韻会挙要』に於ける採否に従っていることがわかる。また第二の点は、当該の第十巻第十五張から第十五巻第二十四張の間は半面十一行の他の部分に対して半面十行の款式で、原本諸版のそれと全く同様であり、さらにこの間の数張は、原本諸版の嚆矢と見なされる元元統二年梅溪書院刊刻本と同じ板木を用いたものと知られ、むしろこの原板を組み込むために、その前後には「説文」の増入を避けて款式の整合を図っていたとわかる。

つまり当該の至正十六年刊本とは、元統版の含有をもとにして考えれば、恐らくは版権上の制約から元統版の使用を前提とし、これへの接合を考慮しつつ新機軸を打出して、『韻会挙要』を用い本文に「説文」等の増入を加え、大幅な補刻を施した印本と解される。

このように考えると本書に於ける「説文」の増入は、至正十六年の劉氏日新堂の協力者によって為されたと認められる。またこの至正十六年刊本とは、版本学上は元統版の補刻本の一種であるとも見なし得るのであったが、原板の保存はごく少数に止まっており、恐らくは便宜上の措置であること、のちに至正版を基にした翻版が数多く現れて影響の大きいこと、通常は大概に拠って至正開刻と考えられていることなどから、本稿でも「元至正十六年刊」と処遇していくこととする。但し同じように元統版に大量の補刻（原本のまま）を加えた後修諸本と、この至正の新増補刻本とは、元統版から分岐する並行関係の上に位置付けなければならないし、当初「説文」の増入が不完全であったことは、新増説文本の展開に一定の影響を及ぼしている。

以上の前提の上に、版刻印行の種別に従って、諸本の解題を加えて行きたい。

○新増説文本之属

新増説文韻府羣玉二〇巻

元陰時夫撰　陰中夫注　亡名増

元至正十六年（一三五六）刊（劉氏日新堂）

先ず序題六篇（五張）。首「韻府羣玉序」と題し、次行低三格で「翰林　滕玉霄序」等の篇目を標し、次行より本文。滕序に次で「姚江村序」「翰林承旨趙子昂題」「陰竹埜序」「陰復春自序」「陰勁弦自序」を存す。毎篇改行、後三篇低一格、諱字擡頭。本文は原本の元元統二年刊本以下に同じ。毎行一八字、中縫部「匀玉序」と題す。

次で目録（三張）。首「韻府羣玉目録」と題し、次行花口魚尾圏発下低一格で声目を標し、次行巻序数を標し（墨囲陰刻）、同行下より低三・一〇格の二段に「一東〈獨用〉」等の韻序数及び韻目を列挙す。毎巻改行。毎行一八字格、中縫部「匀玉目」、尾「韻府羣玉目録」と題す。

次で総目（一張）。首「韻府羣玉事類總目」と題し、次行低一格で「韻下事目」と標し、次行より低二・五・八・一一・一四格の五段に「天文」「地理」以下の事目を列す。次行（次頁）低一格で「韻下類目」と標し、次行より低二・六・一〇・一四格の四段に「音切」「散事」以下の類目を列し、附目あらば直下に「附（墨囲陰刻）」と標し双行にて注す。版式同前、但し尾「韻府羣玉事類總目〈畢〉」と題す。

次で凡例（二張）。首「韻府羣玉凡例」と題し、次行より一ツ書下低二格、第二行以下に亙らば低三格で本文。先ず九条、前後接行の低五格にて注記、又四条を存す。本文は原本に同じ。毎行二一字格、中縫部符号、尾「韻府羣玉凡例〈畢〉」と題す。

右の凡例第二張後半の第二―九行間に双辺無界「瑞陽陰君所編韻府羣玉以事繫／韻以韻摘事乃韻書而兼類書也／檢閲便益觀者無不稱善本堂今／將元本重加校正毎字音切之下／續増許氏説文以明之間有事未／備者以補之韻書之編誠為盡美／矣敬刻梓行嘉與四方學者共之／至正丙申莫春劉氏日新堂謹白（行体）」牌記を存す。「至正丙申」は十六年（一三五六）。「劉氏日新堂」は、至正年間前後に活動した建安書林・劉錦文（字叔聞）の営んだ書舗であろう。[11] 判明する書目（注〈11〉参照）を見る限り、経籍朱注末疏類、韻書、類書などの科挙対策書の版刻が主で、行体の告文類附刻に特徴がある。

なおこれらの首目綴合の順序は伝本によって一定せず、総目を前掲する伝本もある。元統版以下原本の首目との相違点は、牌記の他は主として款式、張数、張付等の相違に止まるが、凡例の首題に「増修」の文字を冠せず、また原本では凡例の後に置かれた「韻下事目」を「韻下類目」の前に合し（両本共に凡例の末に「事目」の接属を示唆する「其目如左」の語あり）、原本の「該載事目」を「事類總目」と改題する変更があった。巻首題「新增説文韻府羣玉巻之一（―二十）　上平聲（墨囲陰刻）／（以下低六格）晩學陰時夫勁弦編輯／新呉陰中夫復春編註」（第二、三行首巻のみ）（第十一至十六巻首題「韻府羣玉巻之幾」）、次行低二格で「一東〈獨用〉」等と韻目を標し、次行より本文。先ず字目（大字、同音字の首は墨囲）直下より字注（小字双行、同音字首は反切あり）（字注の首に「説文（陰刻）」以下の引文を置く場合が多い）（当該の文字「ー」号、分節圏発隔）（出典注記墨囲、引文の前）、次で成語（中字単行）、直下より語注（小字双行）（体式字注に同じ、但し出典注記引文後）、道釈に亙らば圏発を以て隔し、事目標識（中字単行、黒牌中墨囲陽刻）を差挟む（「人名」下注中人名陰刻）。毎韻改行。以下本文の大概を掲出する。巻序・声韻の分属は原本に同じである。

第一巻（二九張）上平声　一東～　三江韻
第二巻（四九張）　四支～　六魚韻
第三巻（五三張）　七虞～　十灰韻
第四巻（六〇張）　十一真～　十五刪韻
第五巻（六一張）下平声　一先～　五歌韻
第六巻（四九張）　六麻　七陽韻
第七巻（四七張）　八庚～　十蒸韻
第八巻（四八張）　十一尤～　十五咸韻
第九巻（四五張）上声　一董～　六語韻
第十巻（第一―十・十一之十二・十三―四十九張）
七麌～　十四旱韻
第十一巻（四八張）　十五潸～二十二養韻
第十二巻（四三張）　二十三梗～二十九豏韻
第十三巻（五八張）去声　一送～　七遇韻
第十四巻（三九張）　八霽～　十二震韻
第十五巻（五一張）　十三問～二十一箇韻
第十六巻（四四張）　二十三禡～　三十陷韻
第十七巻（三四張）入声　一屋～　三覚韻
第十八巻（四四張）　四質～　九屑韻

第十九巻　（四〇張）　十薬～　十一陌韻
第二十巻　（三九張）　十二錫～　十七洽韻

四周双辺（二一・四×一三・三糎）毎半張一一行（第十巻第十五至第十五巻第二十四張一〇行）、行小二九字、中縫部小黒口（匡郭外周接属）、双線黒魚尾（不対向）、上尾下題「匀玉幾」、下尾下張付。

巻尾題「新増説文韻府羣玉巻之幾　声目（墨囲陰刻）」（第十至十五巻尾題「韻府羣玉巻之幾」）、第一巻尾題前に木牌様の墨釘を存す。

前述の如く、本版中、第十巻第十五張より第十五巻第二十四張までは元統版に基づく補刻で、この中の第十巻第四十九張（尾）、第十一巻第十一・十二、二十九・三十張、第十二巻第四十二・四十三張（尾）、第十四巻第三十七張の、都合八張は元統版そのものである。それ以外の箇所は、元統版無修本を基にして「説文」以下の字注を増入し、半面を一一行と改めた本文である。但し翻刻時の訛誤や墨釘等の小異もあり、また成版後の校正によって剜改を施した文字が多い。

〈国会図書館　WA三五・二五〉　一〇冊

巻三補配元至正二十八年刊原本
巻十四―十八、二十補配元元統二年刊四修原本

新補香色覆表紙（二六・〇×一六・九糎）、次で新補淡茶色表紙、中央に「東京圖書館」蔵書票貼附。康熙綴、裏打改装（原紙約二四・一×一五・〇糎、天地截断、破損修補）。序（第三張補鈔）、目録、総目、凡例の順に綴し本文。毎冊二巻。第一巻第一張補鈔、第十一巻第十九、二十八―三十七、二十―二十七、三十八張と錯綴す。

室町期朱竪・傍・句点、磨滅部補鈔、稀に返点、音訓送仮名、墨欄上校注書入。

なお二〇〇二年十二月現在、該本牌記及び第二巻首の書影を、国立国会図書館のウェブサイト内「ディジタル貴重書展」にて閲覧できる（http://www.ndl.go.jp/exhibit/50/）。

〈京都大学附属図書館（谷村文庫）四―八七・イ二〉　二〇冊

巻六補配同版後印本

後補縹色艶出表紙（二四・八×一五・五糎）右肩より打付に韻目、同下方に声目を書し、中央に「宙」と大書、別筆の朱を以て右肩打付に声目、中央下方に「二ノ三」と書す。左肩題簽を貼布

し後筆にて「新増説文韻府群玉〈幾〉」と、中央打付の韻目に重ね目録題簽を貼布し声韻目を列記す。後表紙中央に又別筆にて「二十冊之内」と書す。総目、序、目録、凡例の順に綴し（目録首に谷村一太郎氏手書切紙を差挟む。補配後印本の項参照）本文。毎冊一巻。第二巻第三十一張、第四巻第四十二張補鈔、第十三巻第四十一張欠、第十五巻第六、八、十三張を欠き補紙（界線補鈔、第十三張の首六行のみ本文も補鈔）。補配別装、後掲。間々室町期朱竪・傍・句点（上声以下は稀）書入、墨磨滅部・破損部補鈔。

〈中国国家図書館（マイクロフィルム）一八六三五〉　二冊

存巻六、十五　巻十五補配元元統二年刊原本

明謝肇淛、周亮工、清揆叙、清室旧蔵

漉目表紙（二四・一×一四・七糎）左肩題簽を貼布し「元版韻府羣玉［　］〈第／幾／冊〉」と書す。

首に単辺方形陽刻「謝在杭／臧書印」（謝肇淛所用）、同「周元亮家臧書」（周亮工所用）、無辺方形陰刻「謙牧／堂藏／書記」、尾に単辺方形陽刻「兼牧／堂書／畫記」（以上揆叙所用）、又首に無辺方形陰刻「天禄／繼鑑」、単辺楕円形陽刻「乾隆／御覧／之寶」印影を存す。『天禄琳瑯書目後編』巻十、元版子部に韻府羣玉〈二函／二十冊〉

同上係一版摹印。

謝肇淛、字在杭、長樂人。萬暦壬辰進士。官布政使。

周亮工見前。餘無考。

「謝在／杭藏／書記」〈白文／巻四〉、「周元亮家藏書」〈朱文／毎冊首〉、「沙門／用平」〈白文／巻首／巻五〉、「釋氏／道衡」〈白文／巻四〉、「還／菴」〈白文／巻四〉、「謙牧／堂藏／書記」〈白文／毎冊首〉、「謙牧／堂書／畫記」〈朱文／毎冊首〉、闕巻十二〈末〉。

の著録があり、旧印は本書とほぼ同一の様相を呈している。なお本条「同上係一版摹印」は前項に著録の「韻府羣玉〈四函／二十冊〉」に係っているが、この条の著録は明らかに本版、即ち至正十六年刊新増説文本に関するものである。

〈大谷大学図書館（悠然楼文庫）外丙・八二〉　一〇冊

後補茶色艶出表紙（二四・八×一五・五糎）右肩より打付に韻目を書し、左肩題簽剥離痕、打付に別筆にて「韻府［　］〈声目〉幾」と書し、無辺方形陰刻「伊東／祐暢」朱印影、見返し中央

に単辺方形陽刻「贊岐大西見山／舊藏書」朱印影（大西行礼所用）を存す。凡例、総目、序、目録の順に綴し本文。毎冊二巻。室町期朱合・竪・圏・句点（上声以下稀）、磨滅部・墨釘補鈔、同朱墨補注、校注（「排匀」と校するもあり）、墨釘補鈔を加う（平声のみ）。尾冊の首に鼎形陽刻不明朱印影を存す。

〈布施美術館　一一二三〉　一冊

存巻七

新補黄檗染表紙（二三・三×一六・一糎）。襯紙改装。前後副葉子各二枚、前副葉第二紙後半「昭和三十七年三月／川瀬博士曰／元時代刊」等墨書。第一―二十四、四十五・六張欠。全張匡郭に補鈔を施す。

〈東京大学東洋文化研究所（大木文庫）経部小学類二九〉　一冊

存巻八

後補藍色表紙（二六・六×一六・六糎）、襯紙改装（原紙高約二三・一糎）。前後に宣紙副葉子を後補す。首二四張を欠く。尾に単辺方形陽刻「呉氏宜壽／堂所臧」朱印影を存す。

〈上海図書館　七六五七七二〉　二〇冊

巻一補配（明正統二年梁氏安定堂）刊本

民国于右任旧蔵

新補紺色艶出表紙（二八・三×一八・〇糎）。変形康熙綴、金鑲玉装（原紙高約二三・〇糎）。本文料紙古色添加、匡郭補筆。序、凡例、目録、総目の順に綴するが、本版に係るのは序のみ、後三者は正統版と見られる。毎冊一巻。第十五巻第十八、二十張、第十六巻第一張補鈔。第十七巻第三十三張欠。第十五巻第四張を同第二十四・五張間に、また第十七巻第二十三・二張錯綴。首に単辺方形陽刻「鴻」「選」、同「之氏家／藏書章」朱印影を存し、また同「右任／之友」、毎巻首に同「于」、第十二、十九、二十巻首に同「右任／珍臧」、無辺方形陰刻「右任」、第十三至十八巻首に同「半／哭半笑／廔主」朱印影を存す。

この伝本、従来「元大德刻本」と称せられる。大德本については『四庫提要』本書条に「此本爲大德中刊板、猶時夫原書也」と記し、孫星衍『廉石居藏書記』巻上の本書の条に「此本元大德間刊版」と録し、また莫友芝『郘亭知見伝本書目』に「元大德刊黒口本、毎頁二十二行、行小字二十九字」と、同傅増湘訂補に「元大德本、十一行、雙行二十九字、細黒口、四周雙闌」

と、『増訂四庫簡明目録標注』の邵章続録に「元大德刊黒口本、半葉十一行、行小字二十九字」と録してあるが、『提要』の記事につき楊守敬『日本訪書志』巻四・小学に

韻府羣玉二十篇〈元槧本〉（中略）

按提要録此書云、是書大德間刊本。今攷、時夫之父陰竹野序爲大德丁未、陰復春序爲延祐甲寅、陰勁弦序雖不書年月、而言其書成時其父已没、是大德間此書尚未成、安得有刊本。則所云大德本者意斷之説也。

と駁するのが当たっていて、大德には原本の成立すら見ていなかったと思われる。また前稿第四章及び本稿の考証より、新増説文本の成立は至正十六年刊刻時と判ることから、新増説文本が大德に刊行されたと見ることは出来ない。恐らくは、当該の伝本では牌記告文を刪去し、また巻首に正統版を以て補配し至正版とは別種と見えることから（後出明正統二年刊本の項参照）、陰竹埜序の「大德」を取って、諸目登載の「大德刻本」に充てられたと思われる。

〈大韓民国国立中央図書館　貴三三三〉　一〇冊

朝鮮総督府図書館旧蔵

当館新補黄色雷文繫地蓮華文空押表紙（二四・六×一六・五糎）、次で後補渋引漉目表紙、左肩題簽剥落痕、打付に韻声目を書す。当館裏打改装（原紙高約二四・〇糎、天地截断、破損修補）。見返しに総目末張後半貼附、序、目録、凡例と綴し本文。毎冊二巻。第七巻第二十五、三十五張室町期邦人補鈔。第十二巻第四十三張（尾）欠。第十七巻第三十一張至第十八巻第十五張間錯綴甚し。

稀に室町早期細筆朱墨校注を存し、全帙（補鈔部も）室町期朱竪・傍・圏・句点、磨滅部補鈔、同朱墨補鈔、補注、校注、同墨欄上字目注記（支、陽韻のみ）、返点、連合符、音訓送仮名（序のみ）書入。毎冊首に単辺方形陽刻「朝鮮總督／府圖書館／臧書之印」朱印影を存す。[12]

なお当該の伝本につき、朝鮮総督府図書館開催の創立二十周年記念特別展覧会（昭和十八年、一九四三）陳列図書目録に解題（青木修三氏）がある。

〈東京大学史料編纂所　〇一三九・四〉　二〇冊

新補茶色表紙（二三・八×一六・〇糎）左肩双辺淡墨摺題簽を貼布し「新増説文韻府羣玉　〈幾〉」と書す。次で後補渋引

表紙、左肩香色艶出題簽に「説文韵府〈幾〉」と書し（旧表紙打付書か）、右肩より打付に別筆にて韻目を列記す。押し八双あり。天地截断、裏打改装。序、総目、凡例、目録の順に綴し本文。毎冊一巻。第七巻第三十五・六張、第八巻第二十一・二張、第十八巻第十九張補鈔。なおこの第七巻第三十五・六張と第八巻第二十一・二張を、後印本には均しく欠いている。第一巻尾本文後木牌様墨釘上に後補表紙韻目同筆にて「至正丙申莫春／日新書堂新刊」と書す。稀に室町末細筆返点、音訓送仮名、また近世期（補鈔部同）朱竪・傍・圏・句点、極稀に返点、同朱墨磨滅部・墨釘重書補鈔、校注（稠密、但し上声以下は疎に還る）書入。縹色不審紙。第二、十六、二十巻尾に無辺方形陰刻「國／賢」朱印影を存す。[13]

〈天理図書館　八二一・イ四七〉　二冊

存巻七、九

新補藍色表紙（二六・六×一六・五糎）。金鑲玉装（原紙高約二一・九糎）。前後副葉子・見返し、襯紙と同料。第七巻第二十五至四十七張（尾）、第九巻第一至二十三張欠。全張界線補鈔。首に無辺方形陰刻「毋印／守正」朱印影を存す。[14]

〈東京大学総合図書館　A〇〇・五八三六〉　九冊

巻九・十補配明万暦十八年序刊〔三修〕王元貞校本

欠巻十一・十二

後補渋引表紙（二四・六×一五・五）右肩より打付に室町期墨筆にて韻目を書し、左下方打付に室町期朱筆にて「雲」と書す。左肩題簽を貼布し後墨筆にて「韻府〈声目〉幾之幾」と書す（首冊、題簽剥離痕、打付に又別筆にて「韻府〈上平〉」と書す）。序（第一至三張）、総目、又序（第四・五張）、目録、凡例の順に綴し本文。毎冊二巻。第七巻第三十五・六張欠、第八巻第二十一・二張補配同版早印本（匡郭外を刪去して和紙裏打）。第一巻第十一・十張錯綴。室町期朱竪・圏・句点、欄外補注、同朱墨磨滅部補鈔を加う。

〈台北・故宮博物院（マイクロフィルム）〉　一〇冊

清楊守敬旧蔵

表紙左下方打付に毎声冊数、右下方打付に同筆にて「絶十」と書し、左肩打付に後筆にて「羣玉韵府幾」と書し、右肩より打付に題目同筆にて韻目を列記す。天地截断。序、目録、凡例、総目の順に綴し本文。毎冊二巻。

近世初期邦人朱標点（字目上）、竪・句・傍点、傍線、同墨磨滅部・破損部補鈔、欄上字目標注、同朱墨欄上校注、別朱欄上字目標注書入（上声以下稀）。毎冊首に無辺方形陰刻「飛青／閣臧／書印」朱印影（楊守敬所用）を存す。[15]

〈天理図書館　八二一・イ九一〉　二冊

存巻一―四

後補渋引表紙（二四・四×一五・九糎）左肩題簽剥離痕下打付に「幾幾／共拾冊」と書し、右肩より打付に別筆にて韻目を列す。裏打改装。総目、序、目録、凡例の順に綴し本文。〔毎冊二巻〕。第三巻第四十九張、第四巻第二十三張補鈔。

朱竪・圏・句点、墨返点、音訓送仮名、欄上補注、磨滅部補鈔（序の他は稀）を加う。毎冊首に単辺方形陽刻「渡邊氏／祖先之／遺書」朱印影を存す。[16]

〈龍谷大学大宮図書館　〇二一・四二・二〇〉　二〇冊

巻十一・十二補配元至正二十八年刊原本

題簽〔利峰〕東鋭筆

後補丹表紙（二五・二×一六・五糎）左肩題簽を貼布し〔利峰東鋭〕筆にて「群玉府〈韻目〉」と書し、下方に双辺方形陽刻「東／鋭」朱印影を存す。押し八双あり。裏打改装（原紙約二三・四×一五・二糎、天地截断）。前後副葉子あり。序、凡例、総目、目録の順に綴し本文。毎冊一巻。第七巻第三十五・六張、第八巻第二十一・二張近世初期補鈔、第十五巻第五十張欠、補紙（匡郭界線版心のみ補鈔）。首半張の匡郭は二一・二×一三・二糎大に収縮している。

間々室町期朱合・竪・傍・句点、傍線（上声以下稀）、同朱墨欄外補注（後筆も交う）、稀に墨磨滅部補鈔を加う。毎冊前副葉に単辺楕円形陽刻「寫字臺／之臧書」朱印影を存す。[17]

外題染筆の利峰東鋭は、林宗二孫、宗杜男。片雲子と号す。永禄四年（一五六一）生。出家して建仁寺両足院に住居し、宗二男で臨済宗黄龍派の梅仙東逋に嗣法した。慶長十五年（一六一〇）建仁寺第二百九十七世、同十八年南禅寺住持、元和元年（一六一五）碩学録（初度）受領、寛永二十年（一六四三）歿。[18]

〈京都大学附属図書館（谷村文庫）四―八七・イ二〉

巻一―五、七―二十補配同版早印本　伝釈照什旧蔵

第六巻を存す（二〇冊のうち一冊）。後補縹色艶出表紙（二三・

六×一四・九糎）左肩題簽剥落痕、打付に「韻府〈自五至六〉」と書す。右肩目録題簽剥落痕。料紙傷み。補配別装、前掲。朱竪・傍点、校注、墨磨滅部補鈔、欄上標注書入。首に無辺方形陰刻「南／谷」朱印影を存す）。詳細前掲。

該本首冊目録首に、右掲「南／谷」印の大通寺書僧南谷上人照什に係る旨を誌したと思われる、谷村一太郎氏手書の切紙を差挟んである。今その事実を追認できないが、暫時伝称として標記した。なお同様の朱印影は上海図書館蔵徐乃昌旧獲元元統二年刊二修原本第十三巻首にも見える。

以上の他、四川師範大学図書館、遼寧省図書館に同版残本を存し（『中国古籍善本書目』等）、お茶の水図書館成簣堂文庫にも島田翰旧蔵の同版本を収める由である（『新修成簣堂文庫善本書目』、同書収載の書影に拠れば、該本の摺りは国会図書館蔵本と同程度）。また『天禄琳瑯書目後編』巻十・元版子部、『善本書所見録』巻二・子部、『留真譜』初編巻三・経部にも同版本と思しき伝本を著録、摂影する。

本版の伝存情況について附言すると、本版は元刻を示す牌記を有することから諸家の珍蔵を得、書目等に徴することも容易であることを勘案しなければならないが、次掲以下の明刻諸版に比べても却って伝存の豊富なことは注意される。こうした現象は、当初本版の新機軸が時流に投じ大いに用いられたことに原因すると思われ、本版開刻に遅れて刊行された原本に属する至正二十八年秀岩書堂刊本に於いても、明代に下る後印本では、巻一についてのみ新増説文本を採用補刻していること〔本稿二〇二頁〕を考え合わせると、本版開刻以降、元末明初に於ける新増説文本流行の様が推知される。また北京・上海の伝本、本邦東京大学東洋文化研究所、布施美術館、天理図書館一本を除くと、韓国・台湾の伝本を含め、みな旧時の日本伝来本であることが目を引く。本邦に於ける伝来情況の詳細については、具体的な旧蔵者や書入に関する徴証を欠くので明確ではないが、朱点・朱引の類を見ると、主として室町の後葉から近世初期にかけて、頻繁に繙かれ利用に供された様子が窺われる。また原本系統の諸本には南北朝室町初以来の受容が確認されるのに対し、本版の受容は、やや遅れて最盛を迎えたかに思われる。

同

明正統二年（一四三七）刊（梁氏安定堂）

覆元至正十六年劉氏日新堂刊本

前掲至正十六年刊本と同行款の翻版で、首目も同様であり目録末の木記までも同文であるが、その末行のみ「正統丁巳孟春梁氏安定堂謹白」と改めてある。「正統丁巳」は二年（一四三七）、「梁氏安定堂」には、本書の他に版刻の事業を聞かず、前稿に掲出した本書〔明前期〕刊原本の第一巻後に双辺有界木記「正統丁巳仲秋／安定書堂新刊」を見るが〔前輯四一三頁〕、前稿にも記したように、該版の刊刻は本版との接触を前提とする如くであり、これをも正統二年の安定堂開版と見ることは、なお躊躇される。一方、新増説文本に属する本版は、至正十六年刊本をほぼそのままに、正統二年に安定堂で覆刻したと見て不審がない。底本の至正版と見られる点は、本版の第十巻第二十九張後半第十一行（本来「十賄〈與海同用〉」韻目）の無文であるのが、至正版後印本板木欠損に起因するであろうこと、第十九巻第三十四張後半第四・五行間双行注下方に「楚王好■丨」「中丨一■詳」「越羅■錦」「杜注■」と隣接して墨釘の現れるのが、至正版板木破損に起因するであろうことなどからも明らかである。また至正版では第十巻の途中から第十五巻の途中に至るまでの間に「説文」の増入を欠くのであったが、本版にはその点も継承されており、その直前に「十一之二」を置く第十巻の張付の様子も底本に同じである。さらに、本版中の第十二巻第三十一張、第十五巻第三十一張等の数張は磨滅甚しいが、実のところこれらは至正版そのものと同版かと見られる。底本の一部板木を流用することは、当の至正版自体が元元統二年刊原本の板木を用いるものでもあったので、元明の交にかかる習慣の認められるやに思われ注目されるが、正統版当該箇所につき複数伝本の閲覧を果していないため、この点の考証については後考を俟ちたい。

四周双辺（二〇・八×一三・二糎）毎半張十一行、行小二九字、中縫部線黒口（外周接属）、双線黒魚尾（不対向）、上尾下題「匀玉幾」、下尾下張付。底本に比べ、横画の打込みに豫動の現れる、明前期の字様を示している。

〈大阪女子大学附属図書館　八二一・I三〉　一九冊

欠巻一　伝藤原惺窩旧蔵

後補素表紙（二四・一×一五・四糎）左肩打付に「韻府〈上平〉二」等と書し、右肩より打付に同筆にて韻目を列記し、右下

方打付に同筆にて「共廿」と書す。題下に双辺方形陽刻「九／天」墨印影を存す。古裏打修補、天地截断、虫損甚し。見返し中央に単辺方形陽刻琵琶図並「瀧村記念文庫」蔵書票貼附。毎冊一巻。

稀に室町期朱竪・傍・句点、傍線、同墨欄上補注書入。毎冊首尾に単辺方形陽刻「北肉／山人」朱印影（藤原惺窩所用号・款印と同文なるも、同種印未確認）を存す。尾冊後表紙見返しに浅葱色の簽紙を貼布し近筆にて「惺窩先生藏書／巻末有北肉山人之／小印章」と書し、打付に「明治十四年七月海舟先生惠與セラル先生ノ／鑑定ニヨレハ表紙ノ文字惺窩先生の真筆ナル／ベシト云フ（隔一四格）瀧邨鶴雄」と書す。

〈上海図書館　七六五七七二〉

巻二―二十補配元至正十六年刊本

清翁綬祺、民国于右任旧蔵

第一巻を存す（二〇冊のうち一冊）。金鑲玉装（原紙高約二四・四糎）。凡例、目録、総目も当該の版。凡例第二・一張と綴し、第二張後半の木記を刪去、第一巻尾本文後の木記も刪去する。巻首に単辺方形陰刻「翁／綬祺」、単辺方形陽刻「印若／審臧」朱印影（翁綬祺、字印若）を存す。詳細前掲。

この他『思文閣古書資料目録』一五九（平成十年五月）の七十番に掲載する「韻府群玉　二十冊」も、書影に拠る限り同版本と思われる。この書「謙斎（花押）」墨署と表紙題下に鼎形朱印影を存し、外題、表紙韻目の筆蹟と併せて、同『目録』紹介のように策彦周良の手沢書入本との心象をもつ。海外では台湾『国防研究院善本書目』子部類書類に登載の「新増説文韻府羣玉〈存〉三巻一函三冊〈元陰時夫編　陰中夫註　明正統丁巳（二年）梁氏安定書堂刊本　存巻一至三〉」一本も同版の可能性がある。また『経籍訪古志』巻三・子部類書類に

新増説文韻府羣玉二十巻〈明正統丁巳刊本　寶素堂藏〉

毎巻題目冠新増説文四字、毎字据説文禮部韻添入音義、更増注事件。凡例後述増修大意、且有識語云、瑞陽陰君所編韻府羣玉、以事繫韻、以韻摘事、乃韻書而兼類書也、檢閲便益、觀者無不稱善、本堂今將元本重加校正、毎字音切之下續増許氏説文以明之、間有事未備者以補之、韻書之編誠爲盡美矣、敬刻梓行、嘉與四方學者共之、正統丁巳孟春梁氏安定堂謹白。

と、小島宝素の儲蔵に係る同題同刊記本を著録している。

同

明天順六年（一四六二）刊（葉氏南山書堂）

覆元至正十六年劉氏日新堂刊本

これも前掲至正十六年刊本と同行款の翻版で、首目も同様、但し序尾題「韻府羣玉序〈畢〉」。目録末の木記も同文で、末行のみ「天順壬午孟冬葉氏南山堂謹白」と改めてある。「天順壬午」は六年（一四六二）。元明の間に「南山」と号する書肆は、元至正二十六年（一三六六）に『大廣益會玉篇』『広韻』を合刊した南山書院（篇首「玉篇廣韻指南」後「至正丙午良月／南山書院新栞」、韻首序後「至正丙午菊節／南山書院刊行」牌記）と、明成化間に『広韻』（附「玉篇廣韻指南」）を刊行した南山精舎（序後並指南後「成化戊戌（十四年、一四七八）葉氏南山精舎新刊」牌記、巻末「成化己亥復詳校正」記、王重民氏『美国国会図書館蔵中国善本書目』に拠る）とを知るが、前者は概そ一百年を隔て別舗かと、後者は年代も近く姓氏を同じくし同舗かと疑われる。第十巻途中より第十五巻途中の間に「説文」を補わない点も底本に同じ。但し第十巻の張付に「十一之二」を用いないため、一張を減じて「四十八」に終わる。

四周双辺（二一・二×一三・二糎）毎半張十一行、行小二九字、中縫部小黒口（外周接属）、双線黒魚尾（不対向）、上尾下題「匀玉幾フ」、下尾下張付。第一巻第二十二張左肩に天地双辺「第一冊」の耳格がある。また第一巻尾に双辺有界両行「天順壬午孟冬／南山書堂新刊」、第六巻尾に墨囲単行「書林葉氏南山堂新刊」、第七巻尾に双辺有界両行「天順壬午年孟冬／葉氏南山堂重刊」、第二十巻尾に同「天順壬午孟冬／南山書堂新刊」の牌記を存する。

〈上海図書館　七七二九一八〉　二〇冊

後補浅葱色金銀砂子散表紙（二五・四×一六・二糎）。襯紙改装、浅葱色包角。序、凡例を欠き、総目、目録の順に綴し本文。毎冊一巻。第一巻第二十張欠。第二十巻第十三張補鈔。第一、六、七、二十巻尾の牌記は全て刪去されている。

破損部、匡郭に墨補鈔。首、毎巻首に単辺円形陽刻「子／晉」「汲古／閣」朱印影（明毛晋所用か、真偽不明）、目録首、毎巻首に単辺円形陽刻「陳氏／□□／藏書」朱印影を存す。

〈南京図書館（マイクロフィルム）K三／〇・一〇五六〉二〇冊

清丁丙旧蔵

無文表紙。前副葉子に貼紙して丁丙「新増説文韻府羣玉二十巻〈明天順刊本〉／（以下低一格）前有滕賓姚霄趙孟頫陰竹埜陰復春陰勁絃諸序凡例九條後又増四條後有木記云瑞陽陰君所／編韻府羣玉以事繫韻以韻摘事乃韻書而兼類書者也檢閲便益觀者無不称善本堂今将元本重加／校正毎字音切之下續増許氏説文以明之間有事未備者以補之韻書之編誠為尽美矣敬刻梓行嘉／與四方学者共之天順壬午孟冬葉氏南山堂謹白按木記之語仍本之元刻僅易年號而已」題語を存す。丁氏『善本書室蔵書志』巻二十の当該箇所に比べると、『蔵書志』には標題の次行に「晩學陰時夫勁絃編輯新呉陰中夫復春編注」の一行を補い、貼紙第四行の「敬刻」を「敬刊」に作っている。序、目録、総目、凡例の順に綴し本文。毎冊一巻。第二十巻第三十五張後半以下欠。

首に単辺方形陽刻「宋／嘉」朱印影、無辺方形陰刻「嘉惠／堂丁氏臧／書之記」、同「四庫著録」朱印影（丁丙所用）、単辺方形陽刻「江蘇第一／圖書館／善本書／之印記」朱印影を存す。

なお該本を実見された高橋智氏に拠れば、他に「光緒癸巳泉唐嘉惠堂丁氏所得」印影を存する由。

〈天理図書館　八二一・イ四三〉　一〇冊

後補香色艶出表紙（二五・七×一五・九糎）中央に方簽を貼布し韻目を書す。首冊のみ右肩に小簽を重貼して「月百四十八〈全十〉」と書し、直下に双辺方形陽刻「西荘文庫」朱印影を存す（小津桂窓）。裏打改装。序、凡例、総目、目録の順に綴し本文。室町期朱墨竪・句点、校注書入。毎冊首に双辺円形陽刻「常／樂」朱印影（小津桂窓所用）を存す。[19]

〈天理図書館　八二一・イ二三〉　一〇冊

巻十三―十六補配明弘治六、七年劉氏日新書堂刊本

後補丹表紙（二六・七×一七・七糎）左肩題簽を貼布し江戸初期の筆にて「説文韻府〈声目〉」と書し、右肩より打付に同筆にて韻目を列記す。天地と左辺とに双辺の押し界あり。裏打改装、天地截断。序、目録、総目、凡例の順に綴し本文。毎冊二巻。

第二冊尾「首板（花押）」墨識。室町末（改装前）朱字目傍点、竪・圏・句点、版心上標柱、墨欄上補注、字目標注、近世期（改装後）朱竪・句点、磨滅部補鈔、墨欄上補注書入。毎冊首に単辺円形陽刻不明、単辺方形陽刻文昌神図様朱印影を存す。[20]

右の他、中共中央党校図書館、吉林省図書館、安徽師範大学図書館と（以上『中国古籍善本書目』登載）台北・国家図書館、国防研究院にも同版本を存する模様。また『経籍訪古志』二次稿本の子部類書類「韻府羣玉二十卷〈元槧本　求古樓藏〉」条の欄上に森立之筆にて「余亦藏此本、清川吉人愷舊物也。後贈與其後人菖軒（以上元元統二年梅溪書院刊原本に係る）。又有明天順年間覆刻此本者。於書肆雁金屋青山堂見之。時慶應三丁卯四月下旬」の書入あり。

同

〔明前期〕刊

拠明正統二年梁氏安定堂刊本

本版は、現在まで後掲の南京図書館蔵残本の他に所見を得ないもので、マイクロフィルムによる該本電覧の結果、新増説文本中の、中間の巻に「説文」の増入を欠く至正版の系統に出、墨釘継承等の点から正統版によるものと判ぜられたが、諸事不明のままである。首目は拠本に同様、本属諸版には凡例の後に牌記を置くが、該本ではその箇所が刪去されている模様であり、要領を得なかった。本文の体式も拠本に同様である。四周双辺、毎半張一一行、行小二九字、中縫部中黒口（外周接属）、字様より概ね明前期の刊刻と判じ、便宜この箇所に掲出した。詳細は後考を俟ちたい。

〈南京図書館（マイクロフィルム）K五〇三四〉　二〇冊

巻二―四、十三―十六、十八―二十補配至元正二十八年刊原本

明文彭、彭年、清丁丙旧蔵

表紙無文。首冊前表紙見返しに貼紙二葉、丁丙による「韻府羣玉二十卷〈元刊本〉　文三橋藏書／晩學陰時夫勁弦編輯新呉陰中夫復春編註／前有翰林滕賓序云陰君昆仲為韵府羣玉以事繫韵以韵摘事經史子傳蒐／獵靡遺是能以有窮之韵而寄無窮之事亦大奇矣又至大庚戌江村姚雲序又／翰林承旨趙子昂題云上渉羣經下苞諸子賢於回溪史韻多矣又大徳丁未陰／竹埜倦翁序云一日登書樓見季子棐几萬籤問之曰幸父兄與歳月暇得恣獵羣籍遇欣／然与意会處筆之將繫於韵摘其異而会諸同也爰授以凡例俾勉為之垂三十載告成又延祐甲寅陰／復春自序云予季以事繫韵多所摘奇豈能判然無疑愚故隨筆注釋以備観鑒又陰勁／弦自序云是編遵先子凡例刻意纂集書成而失怙痛哉陰氏父子兄弟著書本末見在序／中千

頃堂書目云時夫奉新人数世同居登寶祐九經科入元不仕詩韻以此最古卷二三四〃十一十二十三十四十五十六十八毎半葉十行〻廿九字是初刻其卷一五六七八九十十七十九二十毎半葉／十一行行亦廿九字則多新増説文四字蓋以續刻配齊真可稱羣玉合璧矣有文彭／之印文寿承印三橋居士文氏震孟諸印」の題跋を存す。これを『善本書室蔵書志』巻二十、子部十収載の同文に比校すると、『蔵書志』は、貼紙第一葉第二行の「註」を「注」に、第九行「見」を「具」に、第二葉第一行「行〻廿」を「行行二十」に作り、末尾に「彭長洲人徵明子官國子監助教善刻印書畫」の語を補っている。跋文中に「巻二、三、四、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十八毎半葉十行〻廿九字、是初刻、其巻一、五、六、七、八、九、十、十七、十九、二十毎半葉十一行行亦廿九字、則多新増説文四字、蓋以續刻配齊、真可稱羣玉合璧矣」と言うのは、該本の補配を指摘するものであるが、行款と書題とによって識別したために、新増説文本でも当初は半面一〇行で巻首に「新増説文」の文字を冠しなかった第十一、十二巻についても「初刻」を称している。首に序、総目、凡例、目録を存す。元来は木牌告文を存し、巻首直前に位置するはずの凡例末張後半は、該本では印出されていない。毎冊一巻。

巻首に単辺方形陽刻「文壽／承氏」、無辺方形陰刻「三橋／居士」、同「文彭／之印」、巻尾に同「壽／承氏」朱印影（以上、文彭所用）、序首に単辺方形陽刻「彭」「年」朱印影（彭年所用）、同「嘉恵／堂丁／氏臧」、同「八千巻樓」朱印影（以上、丁丙所用）、同「江蘇第一／圖書館／善本書／之印記」朱印影を存す。

同　明亡名補

明弘治六、七年（一四九三、四）刊（劉氏日新書堂）

拠明正統二年梁氏安定堂刊本

世上に明弘治六年刻本とも著録の版種で、前掲正統二年安定堂刊本の翻版である。首目底本同様、但し凡例の末に「一元本上聲七麌韻内堵字起至去聲十七霰字韻／止並闕説文今悉増入」の一条を増益し、凡例後の牌記は双辺有界、低一格諱字擡頭にて「是書元大徳丁未瑞陽陰先生所編板／行久矣至於／皇明正統間梁氏安定堂重刊於各字下／續増許氏説文雖加詳明然中間未免／□□闕畧觀者不能無憾本堂三復加／校考至□聲七麌韻内堵字韻起至去／聲十七霰字□□□二千三百有奇並／闕説文今悉増入幸得其全収書君子／但将原書對校瞭然悉備揔龜於斯不／煩考之他

韻敬梓以行嘉與四方共之／弘治甲寅孟夏劉氏日新書堂　謹識」と改めてある。翻字中□格は所見本料紙破損の箇所で、後述する翻版牌記より、第四行「然中間未免／差舛闕畧」、第五行「上聲七麌韻」、第六行「至去／聲十七霰字韻止凡二千三百有奇」の文字と推される。「弘治甲寅」は七年（一四九四）。「劉氏日新書堂」は、前述の元末の建安書肆・劉錦文の後裔とされる。日新書堂による明季の刻書は宣德より嘉靖に至り、概ね弘治、正德の間に活発である。[21] この牌記と新増の凡例末条とを併せ読むと、元の本は上声七麌韻の「堵」字より去声十七霰韻までの間に「説文」の記事を欠き、本版ではこれを悉く補ったというのであるが、上声七麌韻「堵」字は第十巻第十五張の首、去声十七霰韻「霰」字は第十五巻第二十四張首にあり、至正十六年刊本以来、この間を半面一〇行の原本のままとして「説文」を補わなかった点に対応し、本版の本文を閲すると、実際この間に「説文」の増入を施していることが確認される。つまり「新増説文」の措置は、元至正十六年刊本に始まり、本版に於いて全巻に行き届いたと言える。[22] なお、本版牌記中「是書元大德丁未瑞陽陰先生所編、板行久矣。至於皇明正統間梁氏安定堂重刊、於各字下續増許氏説文」の語は、原序中の陰竹埜「大德丁未」序（成稿以前）と、至正版劉氏日新堂牌記の舗名のみを改めた正統版牌記とに拠っている。本書原本の完成開刻は陰竹埜の歿後にあり、また「説文」増入は至正版開刻時の所為で、本版牌記の言は当たらないが、本版開刻の正統版に拠れることを示し、かつ至正版を刊刻した「劉氏日新堂」の事業と本版の刊刻とは断絶のあったことを示唆する。新たに増修を加えた巻の概要は以下の通り。

第十巻	（四六張）	（上声）	七麌～　十四旱韻
第十一巻	（四六張）		十五潸～二十二養韻
第十二巻	（四一張）		二十三梗～二十九豏韻
第十三巻	（五五張）	去声	一送～　七遇韻
第十四巻	（三七張）		八霽～　十二震韻
第十五巻	（五〇張）		十三問～二十一箇韻

四周双辺（二〇・四×一三・三糎）毎半張十一行、行小二九字、中縫部中黒口（外周接属）、双線黒魚尾（不対向）、上尾下題「勺玉幾フ」、下尾下張付。巻尾題底本同様、但し第六巻尾題「新増説文韻府■玉巻之六」と墨釘を含む。第一巻尾に双辺有界両行「弘治癸丑孟冬／日新書堂重刊」、第六巻尾に天地双辺単行「劉氏日新書堂重刊」、第二十巻尾に祥雲中「福」字下童形神捧

持蓮花中双辺単行「弘治癸丑劉氏重刊」牌記を存する。これらの牌記を採れば明弘治六年（癸丑）刊刻ということになる。

〈京都大学附属図書館　四―〇六・イ・三〉　一〇冊

後補縹色艶出表紙（二五・〇×一四・六糎）左肩題簽を貼布し「韻府羣玉〈幾幾〉」と書す。首冊のみ左下方に打付に「共十」と書す。一部裏打修補、天地截断。序、総目、目録、凡例の順に綴し本文。毎冊二巻。第十九巻第十一・二張を同第二十六、七張間に錯綴、同第十九・二十張欠。

第一冊尾「天正十三年［　］三外臣三木」墨識、同朱竪・句点、同朱墨校注、補鈔を加う、但し巻八にて途絶。毎冊首に単辺円形陽刻「百々氏／臧書」朱印影、奇数冊首に双辺円形陽刻「節／竜」、双辺方形中無辺円形陰刻不明朱印影を存す。

天正十三年は西暦の一五八五年で、本版牌記より一百年弱を隔て、本邦への近世初期までの伝来を示す。

〈上海図書館　八一四六九七〉

巻一―三、十七―二十清康熙二十八、九年補鈔（許濬）

巻四―十二補配元至正二十八年刊原本

第十三―十六巻を存す（一二冊のうち四冊）。第十三巻首に無辺方形陰刻「大學士／圖書印」朱印影を存す。詳細前掲。

〈天理図書館　八二一・イ二三〉

巻一―十二、十七―二十補配明天順六年刊本

第十三―十六巻を存す（一〇冊のうち二冊）。第十三巻第一張、第十六巻第四十一・二張用王元貞校本補鈔、第十六巻第四十三・四張を欠き明万暦十八年序刊王元貞校本の当該部分（第十六巻第五十四至五十七張）を補配、第十五巻第四十七張欠。第十四巻尾六張を次冊の首に置くなど第八冊首に錯綴甚し。[23] その他、詳細前掲。

右の他、北京師範大学図書館、北京市文物局、華東師範大学図書館（『中国古籍善本書目』）にも同版本を存する由である。

同

明弘治七年刊（劉氏安正書堂）

覆明弘治六、七年劉氏日新書堂刊本

世上に明弘治七年刻本と著録の版種であるが、前掲日新書堂刊本との関係を考えると些かの疑問を生ずる。首目は底本同様、但し目録第二行、声目「上平聲」下隔一格にて「新増一東宗風戎四韻并新序首八十板」の語を追刻する。底本の増益した凡例末の一条を継承、牌記は「是書元大徳丁未瑞陽陰先生所編板／行久矣至於／皇明正統間梁氏安定堂重刊於各字下／續増許氏説文雖加詳明然中間未免／差舛闕畧觀者不能無憾本堂三復加／校考至上聲七麌韻内堵字韻起至去／聲十七霰字韻止凡二千三百有奇並／闕説文今悉増入幸得其全収書君子／但将原書對校瞭然悉備揔龜於斯不／煩考之他韻敬梓以行嘉與四方共之／弘治甲寅孟夏劉氏安正書堂　謹識」にて、ほぼ底本に同じ、末行の舗名のみを改む。本文、底本同様、全巻に「説文」を増入する。微細な点について見ても、第六巻第十二張前半第二行左「蛙」字注中「蟾蜍（中略）世傳三足者妄也」の「傳」、次行「蝌蚪形圓而有尾（下略）」の「蝌」、第七巻第一張前半第七行左「賡」字注中「説文一本古／文續字」の「續」他、日新書堂刊本に磨滅の著しい文字を、本版には墨釘に作る等の継承関係が認められる。その他、第一巻尾「鬃」字増補。

四周双辺（二一・〇×一三・二糎）毎半張十一行、行小二九字、中縫部中黒口（外周接属）、双線黒魚尾（不対向）、上尾下題「匀玉幾フ」、下尾下張付。第一巻尾に双辺有界両行「弘治甲寅孟冬／安正書堂重刊」、第六巻尾に同「弘治甲寅孟夏之吉／劉氏安正書堂重刊」、第十八巻尾に同「弘治甲寅劉氏／重増校正刊行」、第二十巻尾に祥雲中「福」字下童形神捧持蓮花中双辺単行「弘治甲寅劉氏重刊（上四字左傾）」の牌記を存する。

ただ本版開刻の時点を牌記のままに受取れるかどうか、若干の疑問がある。先ず凡例後の長文の牌記は日新書堂刊本のそれを用い、本版では舗名のみを改めたのであったから、「弘治甲寅」は底本の記文を継承するものとも解される。また第一、六、二十巻尾の牌記には干支、書堂名の部分に剜改の痕跡があって（第十八巻尾は日新書堂刊本に牌記がない）、このうちの第二十巻尾の童神捧持蓮牌木記については、本版を著録した王重民氏『美国国会図書館蔵中国善本書目』の「新増説文韻府羣玉二十巻〈十冊　二函〉明弘治七年劉氏安正堂刻本」条に「巻二十有嘉靖甲申劉氏重刊牌記、此牌記持於納福童子手中、式様頗新奇」の語があり、同条にはまた「孫本目録上平聲下有注、此本無之、不知何故、殆以孫本印刷更在此本後歟」ともあって[24]、目録声目下注記追刻のない別種印本について、巻末の年記が「嘉靖甲申」

であることを伝える。今、同類の伝本を知見し得ないので、王氏著録本が目録加注追刻前の早印本であるのか、目録加注を脱した嘉靖後印本であるのか判断できないが、弘治甲寅（七年）が正しく本版開刻の時点を示すものではない可能性もある。本稿では通説によって便宜「明弘治七年刊」と記した。

〈中国国家図書館　一二三九九〉　二〇冊

清揆叙、清室旧蔵

清室所用帙[25]中後補黄染絹表紙（二六・三×一五・七糎）左肩同工絹地双辺摺枠題簽を貼布し「元板韻府群玉」と書す。序、目録、総目の順に綴し、凡例を欠き本文。毎冊一巻。巻尾の牌記部分は悉く刪去されている（第二十巻尾の童神像は残存）。首に無辺方形陰刻「謙牧／堂藏／書記」、尾に単辺円形陽刻「兼牧／堂書／画記」朱印影（以上揆叙所用）、また首に無辺方形陰刻「天禄／繼鑑」、単辺楕円形陽刻「乾隆／御覽／之寶」、尾に単辺円形陽刻「天禄／琳瑯」、見返しに単辺方形陽刻「五福／五代／堂寶」、同「八徵／耄念／之寶」、同「太上／皇帝／之寶」朱印影（乾隆帝所用）を存す。

該本は『天禄琳瑯書目後編』巻十、元版子部（劉氏日新堂牌記新増説文本下）に著録する

韻府羣玉〈四函／二十冊〉

篇目同上。惟目録首有増刻一東宗風戎四韻並新序首八十版十六字。末有仙童捧雲拱福畫像、當係坊間、即元版重修本。「謙牧／堂藏／書記」〈白文／毎冊首〉、「謙牧／堂書／畫記」〈朱文／毎冊首〉。

韻府羣玉〈四函／二十冊〉

同上係一版摹印。

「謙牧／堂藏／書記」〈白文／毎冊首〉、「謙牧／堂書／畫記」〈朱文／毎冊首〉。

のいずれかであろうと思われる。

〈上海図書館　長六一三五九〉　一冊

存巻八、九

後補淡茶色表紙（二六・一×一五・五糎）。〔毎巻二冊〕

該本は当館普通古籍カード中に「明刻本」として登載のもの、電覧のうちに本版と認定した。

〈天理図書館　九二一・〇七・イ一五〉　一〇冊

後補香色雷文繫地蓮華文空押艶出朝鮮表紙（二六・二×一四・九糎）左肩打付に「韻府羣玉」と書し、その下に韻目を列す。押し八双あり。一部裏打修補。見返し新補和紙。序、総目、目録、凡例の順に綴し本文。毎冊二巻。第三巻第二十八張を欠き同第二十九張を重綴、第五巻第三十八・三十七張錯綴、第十三巻第三張欠、第十五巻第四・五張重綴、第十九巻第三十張を欠き同第三十一張重綴。

本邦近世初期の朱竪・傍・句点、稀に送仮名、同墨標字注、同朱墨校注書入、但し上声以下は標字を欠き、朱点も疎に遷る。

〈佐賀大学附属図書館（小城鍋島文庫）ＯＫＳＨ・二五〉　六冊

存巻一、七・八、十一―三　小城藩興讓館旧蔵

後補渋引表紙（二四・〇×一四・三糎）左肩題簽剥落痕、首冊のみ題簽の下半を存し「［　　］〈一〉」墨書。序、目録の順に綴し、総目、凡例を欠き本文。〔毎冊一巻〕。第七巻第七・八張、第十一巻第三十四張欠、第十三巻第二十三・二十二張錯綴。

第一、六冊首に無辺方形陰刻「鳳池鄭／澄私印」朱印影、毎冊首に単辺円形陽刻「荻府／學校」朱印影（小城藩興讓館所用）、毎冊尾に無辺方形陰刻不明朱印影を存す。

以上の他、甘粛省図書館・安徽師範大学図書館・福建師範大学図書館・鄭州市図書館・鄭州大学図書館（『中国古籍善本書目』）、アメリカ国会図書館（前述）・ハーヴァード大学ハーヴァード燕京図書館に同版本を存する模様、ハーヴァードの本は「日人圏點並装幀」の由（『美国哈仏大学哈仏燕京図書館中文善本書志』）。また『晁氏宝文堂書目』巻中、類書の部に「韻府羣玉〈元刻一部　監刻一部／弘治刻一部〉」と著録する弘治刻本とは、前掲弘治版両種のいずれかであろうと思われる。

総じて本属の概要を記すと、『韻府群玉』開刻の嚆矢たる元元統二年刊本を印行した梅溪書院（もしくは該版の継承者）から一部板木の譲渡を受けた劉氏日新堂では、原板を活かしつつも、単純に翻刻するのではなく、原本の字注に「説文」の記事を増入して新たな本文を構成し、『新増説文韻府群玉』を成立させた。この新増説文本は元末明初の交より盛行し、次第に原本をも凌駕する趨勢となって、南監に於いて原本を洪武韻に改編した〔明洪武八年序〕刊本開刻の際に、本版が校合に用いられ、当初は原本に拠っていた秀岩書堂版の継承者も、首巻を新増説文本に彫り換えて印行するなど、相応の需要を喚起した。

その影響は海外にも及び、日本で室町期以降に盛んに用いられたことは諸伝本の書入に著しく、朝鮮での受容は伝本に見出し得なかったが、朝鮮明正統二年跋刊原本の校合に用いられたことが判明するから、十五世紀前半の段階で朝鮮朝周辺にも一定の流通があったと認められる。

この至正版の盛行は、早くも明前期のうちに複数の翻版を生じている。直接至正版に拠ったと思われる版本には両種あり、一は正統二年梁氏安定堂刊本、一は天順六年葉氏南山書堂刊本である。これらは本文に積極的な改正を伴うものでなく、単に牌記のみを改めて顧みず、ある程度の転訛を免れない底の覆刻であった。現存の伝本から当時の印行の様子を推量することには慎重でなければならないが、やはり至正版の盛行に比べると低調と見ざるを得ず、本文の性質に照らしても、版刻印行の軽易さを徴する事柄と解すべきであろう。しかしその影響という点では、正統版が〔明前期〕刊原本の校合に採られ、また天順版と共に本邦室町期の学事に関与する所があった。そして正統版を拠本とする、さらなる翻版が生まれている。

正統版からは二種の版本を分出したが、その一は〔明前期〕刊本、又一は弘治六、七年日新書堂刊本であった。前者については伝存に乏しく前後の影響関係を測り難い。後者については、至正版以来の「説文」増入の欠を補い完成した点に本文上の重要な進展が見られ、またその故に、新たな版刻を呼び起こした点でも意義が大きかった。但しより広範な伝播に関しては、時期を接して開刻された安正書堂による翻版も与って力があり、安正書堂刊本自体、朝鮮と近世初以降の日本でも用いられる所であった。しかし度重なる翻刻の結果、既に本文の転訛は覆い難いものとなり、元至正十六年の日新堂刊本に始まった新増説文本の翻刻は、その本文の完成と共に一段落を迎え、別本の派生を招くこととなった。明代中葉に現れた新増直音説文本は、「説文」増入を徹底したこの弘治版に基づいて、転訛した本文の修繕よりもさらなる増修に趨り、一方、万暦年間に出た新増説文王元貞校本は、むしろ本文の改正に意を用い、元の至正版に拠ったのである。

以上の関係を図示すれば、左のようになろう。

（原本）

↑元元統二年刊後修原本

（新増説文本）

元至正十六年刊本　　↓（新増説文王元貞校本）
↓明正統二年刊本
↓〔明前期〕刊本
↓明弘治六、七年日新書堂刊本
↓明弘治七年安正書堂刊本　　↓（新増直音説文本）
↓明天順六年刊本

○新増直音説文本之属

新増直音説文本（以下「直音本」と簡称）とは、新増説文本に直音注を加えた種類の本文であるが、新添の直音注（「東〈音冬〉」等）は一括前掲とし、もとの新増説文本自体はそのまま全収されたものであるから、本文上は新増説文本の亜流と考えることができる。この直音本は明代の中葉から版刻に顕われ、現存の伝本から都合三版を知見することができた。

新増直音説文韻府羣玉二〇巻
元陰時夫編　陰中夫注　亡名増　明亡名増補
〔明〕刊　拠明弘治七年安正書堂刊本

先ず序題六篇（五張）。首「韻府羣玉序」と題し、次行低三格で「翰林　　滕玉霄序」等の篇目を標し、次行より本文。滕序に次で「姚江村序」「翰林承旨趙子昂題」「陰竹埜序」「陰復春自序」「陰勁弦自序」を存す。毎篇改行、後三篇低一格、諱字擡頭。本文は原本の元元統二年刊本以下に同じ。毎行一八字、中縫部「序」と題す。

次で総目（一張）。首「韻府羣玉事類總目」と題し、次行低一格で「韻下事目」と標し、次行より低二・五・八・一一・一四格の五段に「天文」「地理」以下の事目を列す。次行低一格で「韻下類目」と標し、次行より低二・六・一〇・一四格の四段に「音切」「散事」以下の類目を列し、附目あらば直下に「附（陰刻、不墨囲）」と標し双行にて注す。毎半張一〇行（拠本一一行）、毎行一八字格、中縫部「勺」、尾「韻府羣玉事類總目〈畢〉」と題す。次で目録（三張）。首「韻府羣玉目録」と題し、次行花口魚尾圏発下低一格で声自を標し、拠本に同じく声目「上平聲」下隔一格にて「新増一東宗風戎四韻并新序首八十板」の語を存する。次行巻序数を標し（墨囲陰刻）、同行下より低三・一〇格の二段に「一東〈獨用〉」等の韻序数及び韻目を列挙す。毎巻改行。行款同前、中縫部「目」、尾「韻府羣玉目録」と題す。

これらの首目は、総目行数の他は新増説文本にほぼ同じで、中縫部標題等の微細な相違に止まるが、原本から引継がれてきた凡例を、この属には欠いている。

巻首題「新増直音説文韻府羣玉巻之一（―二十）　上平声（墨囲陰刻）／（以下低八格）晩學　陰　時夫　勁弦　編輯／新呉　陰　中夫　復春　編註」（第二、三行首巻のみ）（用字区々、第二巻首題「説文韻府二巻」、第三・四、七巻首題「新増説文韻府群玉幾巻」等、第五、八巻首題「新増説文韻府幾巻」、第十二、十七巻首題「新増海篇直音韻府羣玉幾巻」等、第十九巻首「新増直音韻府群玉巻之十九」、第十四巻首は先「乙」張を置き「新増直音説文韻府羣玉巻之十四」と題して同巻内の直音注を配し、次「一」張首又「新増説文韻府羣玉巻之十四」と題し本文）、次行低二格で「一東〈獨用〉」等と韻目を標し、次行より低一格で「新増（黒牌中墨囲陽刻）」と標し、同行下隔一格「東（墨囲）〈音／冬〉凍〈露／皃〉蝀」以下直音注（同韻内の文字を列挙し、同音の首字を墨囲して「音何」の直音注を附し、以下同音の字目を列挙、まま簡単な字義注を差挾む）（この直音注は、下平声二蕭・三肴韻のように、纏めて掲出される場合がある）（上平声四支、七虞、十一真―十五刪、下平声一先、八庚―十五咸、去声十四願―二十一箇、三十陷、入声一尾・二沃、十薬―十三職、十五合―十七洽韻には直音注を冠しない）。次行より本文。本文の体式は前掲の新増説文本に同じである（第四、七・八、十九巻内の各韻は直音注を附さないので、もとの新増説文本と全くの同内容、同行款である。また第六、二十巻では直音注を含むものの、途中の本文を節略し、最終的な張数は同じになっている）。以下本文の大概を掲出する。巻序・声韻の分属は原本以来同様である。左記のうち第十三巻「又十」張は知見本に欠くが、第十・十一張間の本文の接属しない上、後掲の翻版には「又十」を存するので、原存と推定する。

第一巻	（三〇張）	上平声	一東～	三江韻
第二巻	（五〇張）		四支～	六魚韻
第三巻	（五四張）		七虞～	十灰韻
第四巻	（六〇張）		十一真～	十五刪韻
第五巻	（六二張）	下平声	一先～	五歌韻
第六巻	（四九張）		六麻	七陽韻
第七巻	（四七張）		八庚～	十蒸韻
第八巻	（四八張）		十一尤～	十五咸韻
第九巻	（四六張）	上声	一董～	六語韻

第十巻　（四八張）　七麌～　十四旱韻
第十一巻　（四八張）　十五潸～二十二養韻
第十二巻　（四二張）　二十三梗～二十九豏韻
第十三巻（一―十・（又十）・十一・又十一・十二―
五十六張）　去声　一送～　七遇韻
第十四巻（乙・一―三十八張）　八霽～　十二震韻
第十五巻　（五〇張）　十三問～二十一箇韻
第十六巻　（四六張）　二十三禡～　三十陷韻
第十七巻　（三四張）　入声　一屋～　三覚韻
第十八巻　（四六張）　四質～　九屑韻
第十九巻　（四〇張）　十薬～　十一陌韻
第二十巻　（三九張）　十二錫～　十七洽韻

単辺（或は四周双辺）（二一・一×一二・八糎）毎半張十一行、行小二十九字、中縫部、粗黒口、双線黒魚尾（不対向）、上尾下題「匀玉幾フ」、下尾下張付。巻尾題「（新増）直音説文韻府群玉巻之二〈終〉」「新増説文韻府羣玉巻之四」「新増直音韻府群玉八巻」等区々。第二十巻尾に祥雲中「福」字下童形神図様の牌記を存するようであるが、知見の伝本には全像を得なかった。

本版本文の増修について附言すると、音注の増修を書題に謳うものでありながら、その様子には必ずしも内容上の要求に従うものではないと見られる点がある。第一巻を例に取れば、上平声一東韻の首、本文の前に加えられた直音注は都合一一行に及び、この行数が底本以来の半張の行数に等しいことから、以下の本文は底本の第一張前半を同後半に、底本第一張の後半を第二張の前半にそのまま配するという具合に、半面を後へ送るのみとして翻版を容易ならしめている。また第十四巻では、本文の前に一張（張付「乙」）を増益して、去声八霽、九泰韻の直音注を纏めて掲出し（不全）、次の「一」張より底本の行款のままに覆刻、続く十卦、十一隊、十二震韻の直音注も纏めて掲出し、ここでも増益分はちょうど一張に当たる二二行で、次張以降の行款は底本のままに保たれている。直音注の中にしばしば双行字義注の差挟まれるのは、こうした行数調整のためであり、少なくとも増修の多寡に関して言えば、内容上の要求よりも版刻の便宜に即して加減を施したものである。このことは本版及び同系諸版の性質をよく示す事柄と考えられる。

〈宮内庁書陵部　五五六・一〇〉　一〇冊

後補丹表紙（二四・三×一四・五糎）左肩題簽を貼布し「説文韵府［　］幾幾」と書し、右肩より打付に別筆にて韻目を列記す。虫損修補。見返し新補。第十冊後見返し「明治四十一年十二月修補／（低七格）圖書寮」識語。序、総目、目録の順に綴し本文。毎冊二巻。第二十巻第三十九張（大尾）欠。朱竪・訓・圏・句点、欄上標注、同墨磨滅部補鈔、同朱墨欄上校注書入。毎冊首に単辺方形陽刻「宵綯／齋／主人」朱印影を存す。[28]

〈中国国家図書館（マイクロフィルム）五二二三〉　一〇冊

清楊以増、楊紹和旧蔵

表紙、法量、装訂等不明。序（第一張補鈔）、総目、目録の順に綴し本文。毎冊二巻。

本文圏、句点、欄外校注、補注書入。毎巻首尾に無辺方形陰刻「周在／鎬印」印影、毎冊尾に同「子／心」、或は単辺方形陽刻「安／亭」印影、巻首に無辺方形陰刻「朱鴻／緒印」、単辺方形陽刻「乙未／進士」印影（前者は毎巻首。朱鴻緒、浙江海塩人、清乾隆四十年乙未進士）、首に無辺方形陰刻「宋存／書室」印影（清楊以増所用）、単無辺方形陽陰刻「臣紹／和印」、単辺方形陽刻「彦合／珍玩」印影（楊紹和所用）、序尾、総目首に陽刻不明印影を存す。

楊氏『宋存書室宋元秘本書目』子部・明本に「元本韻府羣玉二十巻十冊」と、『海源閣蔵書目』子部・元本に「韻府羣玉二十巻十冊」と、『海源閣宋元秘本書目』巻三・子部・元本に「元本韻府羣玉二十巻十冊」と、『海源閣書目』子部類書類に「明本韻府羣玉二十巻十冊」とある。『北京図書館古籍珍本叢刊76』に該本の影印を収める。

右の他、華南師範大学図書館・重慶市図書館（以上『中国古籍善本書目』）所蔵の伝本も同版か。台北・故宮博物院所蔵の同名八冊本は、阿部隆一氏『訂増中国訪書志』に「（明前期）刊（明修）」と著録し（粗黒口、第六巻尾に「劉氏日□書堂［　］」の牌記を存する由、本版には認め得ず）、同補記3に、該本旧板部分は書陵部本（即ち本版）と覆刻の関係というが、未調査。巻首匡郭の寸法等も異なるようである。また孫星衍の『平津館鑑蔵書籍記』巻一・元版の部に

新増直音説文韻府羣玉廿巻、題晩學陰時夫勁弦編輯、新呉陰中夫復春編注。前有滕玉霄、姚雲、趙孟頫、陰竹埜、陰

勁弦序、俱與前元版相同。此即陰氏韻府羣玉與元板無異。
惟每韻之前新增音釋、未知何人所加。目録上平聲下注云、
新增一東宗風戎四韻并新序首八十板。當是重刊人所記。卷
後有嘉祐乙丑劉氏重刊木長印、作人抱式、祐字微有挖痕、
是書賈作僞以充宋槧、不知撰書人之在元時也。黒口板、毎
葉廿二行、行小字廿九字

と著録の本は、他の直音本諸版が白口であることから、本版か、或は阿部氏著録の別版に該当する可能性がある。

同

〔明〕刊〔明修〕白口本　覆〔明〕刊黒口本

前掲〔明〕刊本と同行款の翻版で、首目も同様であるが、本版では序、総目、目録とも無界である。巻首書題同様、但し題下声目（墨囲陽刻）小三字格を隔つ。

第一巻首（補刻）単辺（一九・七×一二・七糎）毎半張十一行、行小二十九字、中縫部、白口、単線黒魚尾下題「匀玉幾フ」、下方張付。第六巻首（原刻）単辺（或は四周双辺）（二〇・一×一三・〇糎）。一本のみの知見であるが字様や版面磨滅の様子から、序第五張、第一巻第一―十二、十七―二十二、二十九・三十張（尾）、第二巻第一―八、三十三・四、三十七・八張、第三巻第一・二、九・十、十五・六、十九・二十、二十五・六、二十九―三十二、四十一―四、五十一・二張、第四巻第一・二、五・六、十一・二、二十七・八張、第五巻第一―四、二十九・三十、五十一・二張、第六巻第三十九・四十、四十七・八張、第七巻第十三・四、第九巻第十一・二、二十九、四十五張、第十二巻第三十九・四十張、第十三巻第四十三―六張、第十四巻第五・六張、第十七巻第十五・六張、第十八巻第十五・六張、第十九巻第一・二、十一・二、三十三・四張は補刻と見える。また後掲知見本には巻尾を欠き、牌記の有無は不明である。

〈上海図書館　二五六四九〉　二〇冊

清黄丕烈、鄧邦述旧蔵

後補藍色金銀砂子散表紙（二四・二×一五・五糎）左肩香色地題簽を貼布し「元槧韵府羣玉［　］〈幾冊〉」と書し、右肩より打付に別筆にて「潘景鄭先生恵贈　卅六年二月廿三日」と朱書す。題簽上、単辺楕円形陽刻「金粟山／藏經紙」朱印影あり。

襯紙改装。序、目録、総目の順に綴し本文。毎冊一巻。第十三巻「又十」張欠（原欠の可能性もある）。首に無辺方形陰刻「浣／竹居」朱印影、首及び毎巻首に無辺冠帽持杖人図様朱印影、単辺方形陽刻「無近／名闇」朱印影、総目首に単辺方形陽刻「泐明」、同「別號／素玄」、無辺方形陰刻「何可／一曰無／近君」朱印影、巻首に単辺方形陽刻「龍／樹堂」朱印影、単辺方形陽刻「士礼居藏」朱印影（黄丕烈所用）、毎冊尾及び第二十冊前副葉子に単辺方形陽刻「羣碧廬」、同副葉に同「元刻本」朱印影（以上鄧邦述所用）を存す。

なお該本は黄氏、鄧氏の書目題跋類に見えず、潘氏『著硯楼書跋』に著録の「元刻韻府羣玉」は別種新増説文本で、該本と思しき著録は見えない。

同

〔明末〕刊　覆〔明〕刊黒口本

前掲〔明〕刊黒口本の翻版で、首目底本同様、但し目録声目上の魚尾は線黒魚尾とされている。本文も底本に同様であるが、字体の節略は一層甚しい。また第十四巻首の「乙」張、即ち去声八霽、九泰韻の直音注を収める一張を、本版には欠いている。単辺（二一・四×一二・九糎）毎半張十一行、行小二十九字、中縫部、白口（黒口を雑う）、双線黒魚尾（不対向）、上尾下題「匀玉幾フ」、下尾下張付。第十二巻第八張中縫部に「陳禮刊」と工名を刻す。[29] 第二十巻尾に祥雲中「福」字下童形神捧持蓮花牌を存するが、知見本は何れも、牌記と思われる箇所の板を削り、また料紙を刪去し、或はその部分を欠いている。

〈京都大学文学部　中哲文C・XVb・七・一〉　二〇冊

後補淡茶色表紙（二六・三×一六・一糎）。襯紙改装。前副葉後補。序、総目、目録の順に綴し本文。序第一張前半、第六巻第九・十張、第十一巻第十五・六張補鈔、第十二巻第三十四・三十三張錯綴、第二十巻第三十二張重綴。第二十巻尾牌記刪去。毎冊首に無辺方形陰刻「長井／後人」、単辺方形陽刻「雁／門」朱印影、第十六、二十巻首に単辺楕円形陽刻「樵水漁山」、同前副葉子に無辺方形陰刻「琴書／半榻」朱印影を存す。

〈高麗大学校中央図書館　A一二・B一〇〉　一〇冊

朝鮮姜栢年旧蔵

後補黄檗染雷文繋地蓮華唐草文空押艶出表紙（二六・三×一六・一糎）左肩打付に「韻玉〈第幾〉」と書し、右肩より打付に同筆にて声韻目を列記、右下方線外「承十」と書す。本文白紙印。序、総目、目録の順に綴し本文。毎冊二巻。第十三巻「又十」張欠。第二十巻尾牌記挖去。

匡郭二一・〇×一二・八糎にて、収縮を示す。

毎冊首に単辺方形陽陰刻「晉山姜／栢年叔／久之章」朱印影を存する他、毎冊首尾に全南谷城郡栗軒丁日宇氏「黙容室藏」等の鈐印多し。

姜栢年、字叔久、雪峰、又閑渓と号す。本貫、慶尚道晋州。朝鮮宣祖三十六年（一六〇三）生。仁祖五年（一六二七）乙科及第。歴朝に重用され粛宗朝に左賛政に至る。文事をよくし『雪峰集』『閑渓漫録』を撰す。粛宗七年（一六八一）歿。文貞と諡す。以て本版の十七世紀以前の開刻、伝播を証す。

〈内閣文庫（釋迦文院本）三六六・二三〉　二〇冊

後補香色漉目表紙（二六・一×一五・五糎）右肩より打付に声韻目を書す。尾冊のみ右肩に「韻府群玉」と墨書せる柴色地題簽様紙片を貼附す。改装。本文白紙印。序、総目、目録の順に綴し本文。毎冊一巻。第十三巻「又十」「又十一」張欠。第二十巻尾牌記挖去。

〈延世大学校中央図書館　貴五二〇〉[30]　二冊

存巻三―六

巻五・六補配〔明末〕刊新増説文王元貞校本

後補丁字染艶出表紙（二七・三×一六・七）左肩打付に「韻府羣玉〈雅〉」と書し、右肩より打付に韻目を列す。本文白紙印。〔毎冊二巻〕。第三巻首、第四巻尾数張欠。補配別装、次稿掲。毎張前半欄上墨韻目標注、本文字目傍点書入。

上記の他、四川大学図書館、湖南省図書館に同属の明刻本を存する由であるが、本属中のいずれかの版に当たるものか、或は別版に拠るものか不明である。

本属は、全巻に亙る「説文」の増入を加えた新増説文明弘治七年刊本を底本として、さらなる増注を試みたものではあるが、もとの弘治版が翻版の重層によって本文の訛謬が深刻になっていたものを、その点には手を付けずに増注のみを謳い、それも

毎韻の首に僅かに新注を掲して、その他は底本を包摂する形で安易に翻刻した粗雑の本文である。第一に、全く増注の加えられない韻すら多数あり、また増入したとしても韻首の数行であって、基本的には翻刻の便宜に根差した編集である。また底本に殆ど校正を加えなかったことは、却って本属の本文上の価値を減じており、このことは明刊黒口本を継承した両版についても同断である。従って、新増説文本の翻版が種々行われた上に、さらに屋を重ねた観のある本属派生の意義は、主として本書版刻の商業的展開の上にあると見てよいが、本属より新たな版刻を派生していない点や、本属諸版本の伝存の情況を見ると、本属の新たな増注が、新たな需要を喚起することはなかった模様である。

本属内の版本系統は、知見の三版に拠る限り、黒口本からその他の両種が出ていると見て支障ない。一応図示すれば、左の如くであろう。

（新増説文本）
　←明弘治七年安正書堂刊本
（新増直音説文本）
　〔明〕刊黒口本
　　↓〔明〕刊白口本
　　↓〔明末〕刊白口本

最後に、これらの新増説文本及び直音本が、元明間に陸続と諸版を生じながら、朝鮮、日本には翻版を生まなかった理由に触れたい。先ずこれらの諸版本が、朝鮮、日本に伝播しなかったわけではないという点は、伝存の情況からも明らかであり、新増説文本の嚆矢たる元至正十六年刊本が室町期の日本に広く受容れられた様子は殊に顕著であった。そのような前提に立つと、翻版を生じなかった点について、大略二つの理由を考えることができるように思う。一つには、既に元元統二年刊本他の原本諸版が行われ、その中には〔日本南北朝〕刊本及び朝鮮版両種を含んでいて、本書全体としては両朝に一定量の供給があった、という点に意味があろう。つまり、確かに新増説文本では、一書にして『説文』の字注をも参照し得る新機軸を以て世に投じたのではあったが、本書の受容に関して、漢詩文制作時の語彙の補完に重きを置く場合には、その方面の増修の行われなかった新版に、自ら翻刻を成すほどの需要を見なかったということ

ではなかろうか。語彙の方面のみを以て考えると、新増説文本や直音本も原本と変わりがなく、本文の転訛という意味ではむしろ原本に劣っている。このような点に、それほど版刻の容易でなかった朝鮮や日本に於いて、敢えて翻刻の底本には採られれない理由があったかと推される。このことは、正に語彙の増修を目指した包瑜の続編本が出ると、これを併せた増続会通本を生じて、朝鮮、日本に盛んに刊行された事実と対照すべきであろう。また一つには、将来伝本の量的な増加という情況も考えるべきであろうかと思う。こうした点の実証は難しいが、原則として、元明刻本の流通が十分の需要を満たしていれば、わざわざその翻版を刻するには至らない道理であろう。特に本邦室町期の新増説文本利用の跡と、その翻版のないこととは、そのように解してはじめて、同時に理解できることのように思われる。この点は、新増説文本について王元貞が校正を加え、これ以後、伝本の供給に格段の増加を見た後に於いても、やはり朝鮮、日本にはその翻版を見なかった、ということと併せて考えるべきであろう。この種の事象は複合的な原因を持つものであろうが、本稿には先ず上記の二点を指摘して、問題の提起としたい。

本稿を以て、王元貞校刻以前の新増説文本と、その亜流たる新増直音説文本の解題を終わるが、引続き補正を加えて行きたい。また次稿には、王元貞の校刻を以て画期とする新増説文本の更なる展開と、包瑜の続編を契機とする増続会通本の成立と展開について記したい。

注

（1）本稿も柳田征司氏「『玉塵』の原典『韻府群玉』について」（山田忠雄氏編『國語史學の爲に』昭和六十一年五月・笠間書院、『室町時代語資料としての抄物の研究』〔平成十年・武蔵野書院〕に追補再録）に負うところが非常に大きい。旧稿以来の繰返しとなるが、本稿は柳田氏の着眼を重んじ、また氏の調査に導かれつつ文献研究を深めて、氏の説かれた本書研究の必要を満たすべく、版本の考察を進展しようとするものである。また本稿は、文献学上の観点から言えば、本邦中世期に於ける諸版本の流伝と版刻につき、中国、朝鮮の版刻との関わりに於いて論ずることに主眼を置いている。

（2）この清江書堂について、葉徳輝『書林清話』巻四「元時書坊刻書之盛」に、次のような言及がある。

楊氏清江書堂、刻書雖少亦始元末迄明初所刻。通鑑綱目大全五十卷、合尹起幸發明、劉友益書法、王幼學集覽、汪克寛考異、徐昭文攷證五書刻之。徐昭文攷證自序題至正己亥〈十九年〉則在元末矣〈序文後有小榜云、楊氏清江書堂新刊〉。見錢日記。宣德辛亥〈六年〉刻大廣益會玉篇三十卷、見楊譜〈云、後有木牌記云、宣德辛亥孟冬清江書堂新刊〉。此由元至正己亥至明宣德辛亥雖僅七十餘年、然時經鼎革屹然、與虞鄭二氏鼎足而存、固亦書林碩果矣。大抵有元一代坊行所刻無經史大部及諸子善本、惟醫書及帖括經義淺陋之書傳刻最多、其時朝廷以道學籠絡南人、士子身進儒學與雜流並進。國祚簡陋、成風觀於所刻之書、可以覘一代之治忽矣。

このうち冒頭の「通鑑綱目大全」至「五書刻之」の条は、銭大昕『竹汀先生日記鈔』巻一「所見古書」中に見える（「五十巻」原作「五十九巻」）。葉氏は、元至正十九年（一三五九）の「通鑑綱目大全」刊刻より明宣德六年（一四三一）の「大廣益會玉篇」刊刻（『広韻』と同時の篇韻合刊本か、『留真譜』初編巻三―十二・三及び『中国版刻総録』図版三五八・九参照）の間に楊氏清江書堂の存続を認め、同じ建安の虞氏務本堂、鄭天沢宗文書堂と共に、元明間の変革期を乗り切った書肆として揚言したのであるが、銭記には「通鑑綱目大全五十九卷〈序文後有小榜云、楊氏清江書堂新刊〉、合尹起幸發明（注略、以下同）、劉友益書法、王幼學集覽、汪克寛考異、徐昭文攷證〈上虞人、至正己亥自序〉五書刻之」とあり、銭氏の書き止めた「通鑑綱目大全」は、徐昭文「攷證」自序に至正己亥（十九年）と題するのみ、清江書堂の榜記も総序後の如くである。原本を閲し得ないが、楊氏刊記と該本の開版とを元末に懸けられるものではなかろうと思われる。「通鑑綱目大全」には、「新刊資治通鑑綱目大全五十九卷／明書林楊氏清江書堂刻本」と「新刊紫陽朱子綱目大全五十九卷首一卷／明嘉靖十年書林楊氏清江書堂刻本」の伝存を聞く（『中国古籍善本書目』）。

（3）該本の収蔵及び伝来、版式等につき、井上進氏の御指教を得た。

（4）末松保和氏「攷事撮要とその冊板目録」（『青丘史草』第二、昭和四十一年七月、『朝鮮史と史料　末松保和朝鮮史著作集6』〔平成九年、吉川弘文館〕に再録）に指摘がある。

（5）拙稿「〔元〕刊本系『古今韻会挙要』伝本解題―本邦中世期漢学研究のための―」（『日本漢学研究』第一号、平成九年十一月）四十一頁及び図版54・55参照。

（6）ただ所謂「冊板目録」には『韻会』『韻府』の両書を登載しないもののようである。

（7）この点につき目録学、歴史学上の言及があり、例えば『世宗実録』や『攷事撮要』収録の「冊板目録」に基づいて、地方官庁の造板、蔵板の事情が説かれている（注〈4〉末松氏論文等）。本稿ではこうした知見と、実際の伝本に基づく知見との整合する点の記述に、一の意義を見出している。

（8）本版の印行について、布施美術館蔵本第十四巻の料紙に銅活字試印反故を用いた例を基に内府での印行を推測したが〔前輯四〇七頁〕、当該の巻は〔朝鮮前期〕刊本による補配部分に当たるので、これを本版に懸けたのは失考である。記して訂正したい。

（9）該本の襲蔵及び改装等について、大韓民国国立中央図書館の李惠銀氏に御指教を得た。以下の同蔵本についても同様である。

（10）両名の応挙について、前稿には小科、大科の判別を能くしない点があったので補正する。この点に関して、延世大学校中央図書館の金永元氏に御指教を得た。

（11）元元統三年（一三三五）刊『広韻』、同後至元四年（一三三八）刊『春秋集伝釈義大成』、同六年刊『伯生詩後（続編）』（目録末「時至元後庚辰劉氏日新堂謹識」記）、同年刊『揭曼碩詩集』（目録首「至元庚辰季春日新堂印行」記）、同七年刊『朱文公校昌黎先生文集』、元至正元年（一三四一）刊『朱子成書』、同二年刊『四書輯釈大成』、同年刊『増広事聯詩学大成』、同六年刊『漢唐事箋対策機要』、同七年刊『詩経疑問』（序末署「時至正丁亥蒲節建安書林劉〈錦文〉叔簡」）、同八年刊『春秋胡氏伝纂疏』（自跋後「建安劉叔簡栞于日新書堂」記、元（一説同九年）刊『太平金鏡策』附『答策秘訣』（巻末「□□□□孟秋建安日新堂謹誌」記、附刻首署「建安劉〈錦文〉叔簡輯」）、同十二年刊『詩集伝通釈』（「詩傳綱領」首題「建安劉氏日新堂校刊」、第一巻尾「至正壬辰仲春日新書堂刻梓」記）、同十四年刊『書集伝音釈』、同十五年刊『増修互註礼部韻略』、同十七年刊『明本排字九経直音』、元刊『新編方輿勝覧』等の元末の版刻や、その他若干の刻書伝鈔本（丁丙『善本書室蔵書志』録「春秋金鎖匙一巻〈影元刊本〉（中略）巻末有至正癸丑日新堂刊八字」。至正癸丑は明洪武六年相当とされる〈『書林清話』巻四〉）等の著録にも知られる。但し葉徳輝『書林清話』巻四「元時書坊刻書之盛」では、右のうちの『朱文公校昌黎先

生文集』『朱子成書』『増修互註礼部韻略』『明本排字九経直音』の四書を「日新書堂」の下に別掲し、劉氏日新堂とは区別している。

(12) 『国立中央図書館善本解題 I』参照。

(13) この「國／賢」印につき、京都大学附属図書館清家文庫等に収蔵書中にする清原国賢所用印影と比較を試みたが、同種のものを得なかった。

(14) 『天理図書館稀書目録 和漢書之部 第三』一八三五参照。

(15) 阿部隆一氏『訂増中国訪書志』収録「中華民国国立故宮博物院楊氏観海堂善本解題」子部類書類参照。

(16) 『天理図書館稀書目録 和漢書之部 第四』六一三参照。

(17) 『龍谷大学図書館善本目録』二二〇参照。

(18) 伊藤東慎氏『黄龍遺韻』参照。

(19) 注(14)目録一八三四参照。

(20) 注(14)目録一八三三参照。

(21) 宣徳間(一四二六―三五)刊『書伝大全通釈』(第三巻首題下「書林三峯劉氏日新書堂重刊」記)、成化四年(一四六八)刊『新刊宋学士夾漈先生六経奥論』(序後「書林劉氏日新堂刊」牌記)、同年刊『歴代道学統宗淵源問対』、同十一年刊『標題詳注十九史音義明解』(劉氏日新書堂)、同年刊『増修箋注妙選群英草堂詩餘』、弘治間(一四八八―一五〇五)刊『資治通鑑綱目』、弘治十七年刊『新刊通鑑一勺史意』(劉氏日新書堂)、同十八年刊『東漢文鑑』、正徳六年(一五一一)刊『性理群書集覧』(第十七巻後「書林劉氏日新堂刊」牌記)、同年刊『太医院経験奇效良方大全』(総目後「正徳辛未孟夏日新書堂重刊」牌記)、同十年刊『続真文忠公文章正宗』、同十五年刊『張東海先生文集』、嘉靖七年(一五二八)刊『新刊太医院外科心法』、同八年刊『新刊医林類証集要』、同四十三年刊『類編傷寒活人書括指掌図論』等が知られる。右のうち首の『書伝大全通釈』は、『中国善本書提要』『北平図書館善本書目』著録、両者とも宣徳間の版刻に擬す。前者に拠れば、目後に「宣徳乙卯歳仲秋日守中書堂鼎新刊行」牌記を存する由、王氏按「劉氏日新堂開設在元、此又題作守中書堂者、疑入明以後、子孫分其業、又各立堂名故也」。

(22) この点、注(1)柳田氏論文に指摘がある。

(23) 注(14)目録一八三三参照。

(24) 孫星衍『平津館鑑蔵書籍記』補遺著録本。但し「新増直音説文韻府羣玉廿卷」に係る。孫記「目録上平聲下注云、新増一東

宗風戎四韻并新序首八十板、當是重刊人所記」。全文は本文二四三頁に掲載した。

(25) 宮内庁書陵部蔵宋刊本『重広分門三蘇文粋』二八冊（五〇二・四一二）所用帙同工。

(26) 注（16）目録一〇〇三参照。

(27) 明前期の新増説文本諸版を閲すると、しばしば他に比べて磨滅の著しい板木を認めることがある。現在までその一々を対査していないので確言は難しいが、これらは恐らく底本の板木自体を新版に組み入れて用いたものと思われる。もとの至正版からして元統版の原板を流用しているのであったが、そうした現象は至正版の場合と同様に、原板保有者からの版権の分譲に関わる事柄と受け取られ、建陽書林等、明季坊間の版刻の連鎖を考える際に、款式や本文と併せ、十分に配慮すべきことと思われる。

(28) 『図書寮漢籍善本書目』子部類書類参照。

(29) 李国慶氏『明代刊工姓名索引』に拠ると、この陳禮の名は隆慶六年（一五七二）刻本『籌海図編』及び万暦三十四年（一六〇六）刻本『八代詩乗』にも存する由であるが、異同を審かにしない。

(30) 該本について、『延世大学校中央図書館古書目録 第二輯』に「新増説文韻府羣玉」と著録するが、これは補配の第五・六巻首題と、第三巻の首を欠くのと、該版第四巻首題に「直音」の二字を欠くためと思われる。

〔附記一〕

ご自身の収蔵になる誠庵文庫本の閲覧をお許し下さった誠庵古書博物館長　趙炳舜氏に深謝を申し上げます。

文献調査をお許し下さった著録本収蔵諸機関の関係各位に篤く御礼を申し上げます。

〔附記二〕

本稿は、平成十三年度文部科学省科学研究費・特定領域研究（A）「東アジア出版文化の研究」計画研究「和漢の辞書・類書の書誌的研究」に基づく成果の一部である。